
考え方よ。

回収屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

考え方よ。

【Zコード】

Z2973Z

【作者名】

回収屋

【あらすじ】

新薬開発のコンサルタントと軍用兵器の設計を専業とし、世界規模で展開する国営企業・『PFRS』^{パフリス}。そこから逃亡した蒼神槐^{あがみえんじゅ}は、PFRSが隠蔽するバイオハザードを告訴しようと試みるが、ヒットマンの強襲により失敗。彼は最後の手段として、調査会社のエージェントを伴つての敵地潜入を画策するが、依頼を受けてやって来たのは何故か……明らかに拳動不審な二人組の少女だった。

『神の設計図』^{バイタルズ}と呼称される遺物をめぐり繰り広げられる、政府と軍部とPFRSの三つ巴。その中で葛藤する青年・蒼神と、彼を

取り巻く不確定要素達の攻防…… + 「ああ～～、やつぱ美青年の尻
はええのう」 「ダメよッ、オマツコヒトさんが見てるー.」

ネットに消えた学説と護衛される青年（前書き）

世界中で大ヒットしたアニメ映画「攻殻機動隊」などの監督、押井さんが現在のアニメ作品について「オタクの消費財と化し表現の体をなしていない」と批判した。

ネットではこの発言に納得する人もいるのだが、自分達の好きなアニメを批判していると感じたアニメファンは「押井こそオワコン」などと押井さんに対する盛大な批判を展開している。

ほとんどのアニメはオタクの消費財と化した

朝日新聞は2011年11月21日付けの電子版コラム「アニメゲ井」で、押井さんの東京芸術大学大学院映像研究科での講演（1月12日開催）を紹介した。講演で押井さんは

「僕の見る限り現在のアニメのほとんどはオタクの消費財と化し、『ページのページ』の『表現』の体をなしていない」

と語ったという。つまり、制作者には新たな創造性や、作品を通じて訴える思想的なものが欠如し、過去にヒットした作品の焼き直しばかり。例えば「萌え」が流行すればそうした作品ばかりになっている。また、今のアニメはオタクと呼ばれるファン層に媚びたものが多々、こうしたことから「表現」が制作者から無くなつた、という批判だ。

確かに11年9月から始まつた20本近い新作テレビアニメを見ると、さえない男性主人公の周りに美少女が群がる「ハーレムアニメ」が驚くほど多く、過去にヒットした「ハーレムアニメ」作品と共に通する内容がかなり多い。

富崎駿監督も過去の作品の「コピー」に嘆いていた

実は、過去のヒット作品を真似たものが増えている」とについては、以前から警鐘が鳴らされていました。富崎駿監督はベルリン国際映画祭で「千と千尋の神隠し」^{グラントプリ}が金熊賞を獲得した02年2月19日、記者会見を開き、記者から日本アニメの世界的な地位を質問されると、「日本アニメはどん底の状態」とし

「庵野が自分たちは「コピー」世代の最初と言っていたが、それより若いのはコピーのコピーだ。やうしたこと（アニメ業界が）どれだけ歪んでいて薄くなっているか」

などと答えている。庵野といつのは大ヒットアニメ映画「新世纪エヴァンゲリオン」の庵野秀明監督のことだ。

今回の押井さんの発言についてネットでは

「萌えクソアニメの乱発は誰が見ても異常」
「アニメ業界が飽和しそぎで、コピー品を粗製乱造しなきゃ回らなくなってる」
「売らなきゃ食つていけないからな。安定して売れるのがオタク向けの萌えやH口」

などと納得する人もいるのだが、現在主流となっているアニメのファン達は、自分達の趣味趣向、好きなアニメを批判するのは許せない、と激しく反発。しかし理論で立ち向かえないからなのか

「押井のアニメくそつまんねーんだよ」
「押井も信者向けの消費財じやん」

などといった作品批判や、人格批判へと発展し、大混乱となつてゐる。

この記事は、『小説家になろう』における作品の傾向にも該当します。“異世界”・“主人公最強”・“転生”・“ハーレム”・“チート”……オリジナルも一次創作もこの手のタグであふれかえっています。

アニメもラノベも観てもらつてナンボ、読んでもらつてナンボ。それは事実です。が、作品のファーストフード化に回収屋は食傷気味です。ちょっと考えてみましよう アナタはより良い味を求めてハンバーガーや牛丼を食べに行きますか？ そう、まずあり得ません。ただ単純に安く手っ取り早く、口当たりの良い刺激が欲しい場合の効率的な手段として選択されているのです。まさに『消費財』です。食べたその瞬間は確かに一定の満足感が得られます。が、店を出た直後には味の記憶など脳から消えます。作品も同様：「どこかでよく目にするファクターに誘引され、その時は満足感が得られます。しかし、人から「で、どのシーンに一番感動した？」『ストーリーのあらすじを教えて』などと聞かれた際、どこまで答えられるでしょうか。正直、難しいでしょう。消費者は既に欲しかった刺激を消化し終え、また次の新しい安定した刺激を求めているのです。そこには作品を楽しんだという“記録”はあっても“記憶”はありません。

一次創作で一本完結させている回収屋が述べるのもなんですが、自分の作品構築のためにプラスとなるオリジナルに触れてみたい！

…常日頃から思っています。

一次創作にしか興味がない読者様をガツツリと矯正させる意味でも、今回の作品を披露していきたいです。

ネットに消えた学説と護衛される青年

『惑星自壊説』 今世紀初頭、ネットのある科学サイトに発表された学説。仮説の域を出ない突拍子もない理論であつたため、当時は一部のカルト的な支持者しかいなかつた。38億年前、地球上に1個の隕石が落下。隕石に含まれていたアミノ酸を素に、原始生命が発生する。あらゆる気象条件下で化学反応を開拓し、次々と新しい生命が創り出されていった。彼等は最初、ごく単純な遺伝情報しか有しておらず、他の生命を食らつて取り込むことにより、複雑なDNAを構築し進化していった。地球という温床の中で、何億年もの間その行為は続き、新生しては滅びを繰り返す。それは自然の法則に完璧に則った現象であり、地球はただじつとその永久不滅のサイクルを見守っていた。そこで……地球は思った。

『死』とは何だ？

惑星は巨大な一個体の生命であり、いわゆる『意志』を持つとされる。が、その意志はあまりに不完全で、死に対する不安や恐れを理解できていなかつた。地球は自らの破壊力を行使し、5度も大絶滅を繰り返したが、どの手段も決定的なダメージを与えるには至らず、地球の意志は不完全なままだつた。しかし、彼には時間があつた。あり過ぎた。だから永い時を経て考えた。

ダレかに殺してもらえばいい

最後にとられた手段こそが『人類』だつた。現生人類は、およそ20万年前に一つの独立した種として出現した。殆どの生命体が自然環境のサークルに解け合えるのに対しても、人類だけが進化の過程

でサークルから外れていった。異常なスピードで脳髄を発達させ、爆発的に増殖し、生態系のピラミッドを決定づけ始めた。海洋を汚し、大気を濁らせ、大地を腐らせ、他種を滅ぼしだした。このことから引き出された一つの結論……

＜『人類』とは、地球が自らを滅ぼすために創り出した『生体兵器』である＞

この学説を発表した科学者は、マスクの前には一度も姿を見せず、ネット上のみでのゲリラ的活動を繰り返し、ひたすらこの学説の危険性を主張していた。このままでは近い将来、確實に地球の自壊は成功してしまう。地球は人類を作為的に進化させて、より優れた遺伝情報の所有者を生成している。20万年近くかけた計画が最終段階に入っている。名を明かさず、顔も見せず、ひたすらネットの中で声を上げるその科学者は、新興宗教の教祖の如き扱いを受けている。この小さな騒動が、一般メディアにも取り上げられるようになった時分の1ヶ月ほど前……日ノ本の本土から遠く離れたとある海域にて、局所的な海底火山が発生。それにより生じた巨大な海底の亀裂から、正体不明の遺物が発見された。それは『人型』。回収し検査した当時の国家調査室が出した回答……

＜全長170センチ・重量80キロ。材質は不明。人間の造形に酷似しており、体表面は透明で、内部構造が肉眼で認知できる。骨格・筋肉・臓器・神経・血管……その全てが人型容器の正しい位置に形成され、電子顕微鏡を使って初めて確認できるような、微細な組織まで設計された『完全な人体設計図』＞

最も奇異とすべきは、その人体設計図が出土した海底の地層の年代。測定した結果、その遺物は現生人類が生じるよりも以前のモノと断定された。この遺物は『神の設計図^{バイタルズ}』と名づけられ、国家調査

室は情報規制法案を立ち上げてハッキング防止対策を施し、回収にあたつたサルベージ班には情報機関の監視がつくほどだった。ネット上を騒がせた科学者が、この一件と何だかの関係があるのでは…そんな噂が囁かれた。しかし、国家調査室のハッキング対策により、問題の科学者も息を潜めだし、次第にその存在はネット社会の記憶から消えていった。そして

20年が経過した。

一人の青年が刑務所の中にいた。数名の私服刑事が周囲をウロウロしているが、特に張り詰めた感じの空気でもない。30坪程の広さがある一室で、その青年はソファに腰掛けて両手を組み、何かを心配するような面持ちでうつむいている。

「どうぞ楽にしてください。我々がついていますので」

刑事の中でも一際貴禄のある初老の男が声をかけてきた。そして、コーヒーの注がれた紙コップをその青年に差し出した。

「ええ……分かっています」

そう言って紙コップを受け取る青年の顔には、明らかに疲労の色が濃く出ていた。歳の頃は20代前半くらいだろうか、まだ少々幼さが残るその顔からは、何かに怯えるような落ち着きの無さが見て取れる。

「あの……ちょっとトイレに」

「ええ、どうぞ」

この部屋に出入り口は一つ。コーヒーを差し出した初老の刑事が、出入り口の側に立っている若手の刑事に目配せする。ドコへ行くにも護衛がつく。刑務所の中なのだから当然の処置なのだろうが、見知らぬ複数の人間に、四六時中まとわりつかれるのは力ナリのストレスになる。『インペリアム』と呼ばれるこの刑務所は、一般的の犯罪者収容施設とは異なり、犯罪に巻き込まれてしまった被害者や、大物犯罪者を摘発するのに重要な役割を果たす証人を保護するため

の隠れ家。國家調査室の直轄で、軍施設並みにセキュリティレベルが高い。

「ボクの証言で本当に解決するんでしょうか……？」

部屋に戻った青年がボソッと呟いた。

「もちろんです。我々に全て御任せください」

何とも冷静に言つてくれるが、言つのは簡単。問題は結果だ。

「明日の段取りは？」

「法廷には朝9時到着予定ですの、7時半にはここを出ます。やるそり休れますか？」

「……………そうさせてもらいます」

と呟つても、寝室が別に用意されているワケではなく、ソファに横になるだけ。そんな生活が既に5日も続いている。

「それではまた明日」

初老の刑事は、出入り口にずっと立っていた若手の刑事に一通りの指示を出し、他の刑事達と共に部屋を後にした。

「……………」

窓一つ無いこの収容施設に閉じこもつていると、昼と夜を区別する感覚が日増しにおかしくなつてくる。テレビや新聞に目を通して一日の経過を知るが、外出できないままだと、まるで世界から追い出されたような違和感が生まれる。

「もう少しの辛抱ですよ、蒼神博士」あがみ

青年の心境を読み取ったのか、見張りとして残った若手刑事が、照明の一部を落としながら声をかけてきた。

「……………宜しくお願ひします」

『蒼神博士』と呼ばれた青年は、ペコリと小さく頭を下げ、毛布をかぶつて横になつた。

「……………」

静かだ。あまりに静かだ。雑音が一つも聞こえないと、逆にその静寂が耳障りになるくらいだ。

(よそう……今更考えても遅い)

視界が暗くなる。目を閉じる。眠気が.....

フォンフォンフォンフォン！！ フォンフォンフォンフォン！！

「 !?」

一匹目の羊が柵を越えようとした瞬間、けたたましい警報が鳴り響いた。見張りの刑事はホルスターに手をかけ、青年はソファから飛び起きた。

「 な、何が……！？」

「 ……分かりません」

バタバタバタバタッ！

出入り口の向こう側から複数の足音が。刑事がホルスターから自動拳銃トマチックを抜く。

「 博士ッ！」

扉のコンソールが点滅してロックが解除され、さつき出て行ったばかりの刑事達が慌てて雪崩れ込んできた。

「 主任、何事ですか！？」

「 敷地内に不審者の侵入を確認した。相手は一人だけだ」

「 敵襲ですか！？」

「 分からんが……もしそうならとんだマヌケだ」

「 刑事さん、ここにいて大丈夫なんですか？」

青年が怯えきつた声で問い合わせる。

「 大丈夫もなにも、インペリアムにおいてこの部屋が最もセキュリティに優れているんですよ。心配ありません」

そう言つて他の刑事達に指示を出し、素早く配置につかせる。

「 テレビをつける。監視カメラとチャンネルを合わせるんだ」

若手刑事がモニターを調整すると、監視カメラの映像が映し出される。正面玄関口、事務室、医務室、屋上、中庭.....発見。

「 何がありや？」

中庭をモニターしているカメラの映像に、不審人物が映っている。

ライトアップ用の照明が強すぎて顔はよく見えないが、どうやら女
のようだ。体にピッタリと張り付くようなボディースーツを装着し、
そのうえ裸足。不審尋問を受けても文句の言えないような格好だ。
どうやって中庭まで侵入したかは不明だが、モニターの女は何かを
探すかのようにキヨロキヨロしている。

「こちらセクション・ヒ、モニター室応答しろ」

刑事主任が無線機で呼びかけた。

「こちらモニター室。そつちは異常無いか？」

「今の所はな」

「機動部隊が全員配置についた。コスプレまがいのイカレ女の方は、
まだこちらの動きに気付いていないようだがな」

「結構。絶対に殺すなよ。貴重な情報源になるかもしけん」

主任が北叟笑む。その後

「蒼神博士えええええ
おおおおお
！　ドロドロのおおお

豪胆なのがバカなのか、女はターゲットの名を大声で喚く有様だ。
その声は監視カメラのスピーカーを通して、青年のいる部屋にもハ
ツキリと聞こえてきた。

「そんな……何てことを！」

名を呼ばれた本人が、口を半開きにしてたじろいだ。

「知っている顔ですか、博士？」

「い、いえ……そんなハズは……」

ピピッ、ピピッ、ピピッ

刑事主任の無線機が鳴る。

「準備万端か？」

「いいでもいける」

主任は無線機を片手にモニターを凝視して……

「よし、制圧開始ツ――！」

「ゴー・サインが出される。同時に警棒やライフル銃を持った機動隊員十数名が、建物の窓や物陰から躍り出て、侵入者の周囲を取り囲んだ。

「そこを動くなッ！」

「早く腹這いになれッ！」

「武器は持っていないかッ！？」

スピーカーから機動隊員の喧騒が聞こえてきて、目標の女不審者があつという間に制圧されたかのように思えた。

「…………」

瞬きを忘れ、真剣な目でモニターの様子を見つめる蒼神博士が、「クリと息を呑む。

「うわッ、びっくりしたああああ～～！ アンタ達ダレなのだああああ～～！？」

女不審者が自分の置かれている立場を無視し、無責任なセリフを叫ぶ。

「そりやこっちのセリフだ！ 政府施設への不法侵入の現行犯で逮捕する！」

機動隊員の怒号がどぶ。

「蒼神博士ええええ～～～！」 聞こえないのおおおお～～～！？」

機動隊員の指示に一切従うことなく、またもや大声で青年の名前を呼ぶ始末だ。

「何だコイツは……？」

あまりのマヌケな状況に、モニターを見つめる刑事達も呆れ返っている。

「いいかげんにしろッ！」

業を煮やした隊員の一人が女を捻り伏せようと、その肩をつかもうとした瞬間……

ブワッ

！！

隊員のでかい団体が宙に浮いて、背中から勢い良く地面に落下する。

「触らないでほしいのだッ、バカ！！」

隊員の胸ぐらを片手でつかんで無造作に投げたのだ。女性の腕力とはとても思えない。

「抵抗するなッ！」

警告すると同時に、警棒を構えた隊員一名が左右から挟みこむようにして襲いかかるが、女はその場から一步も動かず、上半身を器用にひねって一本の警棒をかわすと、両の拳を裏拳気味に相手の顔面へと叩き込んだ。

「おいおいッ……！？」

拳を喰らった二名は鼻血を吹いて崩れ落ち、モニターで観戦する刑事達に不愉快な緊張感がはしる。

「大人しくしろッ！　いいか、これは最後通牒だッ！」

今にも発砲したくてウズウズしている銃口が女不審者に向かれ、スコープサイトのレーザーが目標の急所を集中的に這っている。「うるさいなあッ！　早く蒼神博士を殺して帰らないと怒られるのだッ！　だからオジサン達邪魔しないで　　」

バンツツツ　！！

発砲。

「……やつたか？」

モニターを見つめる刑事主任が画面にググッと近づいて目をこらす。

「ん……？」

様子がおかしい。

「何だ？」

女の上半身が大きく後ろに仰け反って、曲がった釘のように固まっている。

「どうした？ 命中したのか？」

刑事主任が無線で問う。

「分からん……少し待ってくれ」

ライフルをしつかりと構えた隊員数名が、合図を受けて駆け足で女に近づき、十分に警戒しつつ様子をつかがう。

「どうなんだ？」

「あ～～……こりゃヒテえ。貫通しないところを見ると、一応、防弾処理のされたボディースーツのようだが、胸元がえぐれちまつてやがる」

「死んでいるのか？」

「この体勢で生きてたらコントだ」

「よし、検死官に委ねて身元を調べろ。わずかでも法廷で使える情報があれば」

ヒュッ

「う……ッ……！」

女の変死体が突如、上半身を360度ひねって元の体勢に戻った。と同時に、無線機から呻き声のようなものが聞こえ、取り囲んでいた隊員達がもがくように倒れ伏した。

「な、何事だッ！」

動搖する刑事主任が見たのは、女の両手にしつかりと握られた『刃物』。刃渡り30センチほどのシースナイフが一本……照明に照らし出されてギラギラと光っている。

「ひッ！」

明確な殺傷能力を目にした蒼神博士が、顔を引きつらせた。

「痛いなあッ！ 危ないのだッ！」

ライフル弾の直撃を受けて素直に感想を述べている時点で、尋常な相手ではない。

パンツ！ パンツ！ パンツ！

残る隊員達は指示を待つこともなく本能に従つて拳銃で応戦する。
「こんなにやる！！！」

女の方はそれに応えるかのようにナイフを構え、機動隊めがけて
飛びこんでいく。

「 なツ！？」

思いもよらない展開に、モニターを凝視する全員がマヌケ面で口
を半開きにしている。

「主任……我々はどうします？」

「何もするな」

「……は？」

「篠城だ。ここでやり過ごす」

「し、しかし……」

スピーカーからは、あまり聞きたくない隊員達の断末魔が聞こえ
てくる。

「我々の仕事は、あくまで蒼神博士を無事に法廷へ送り届けること。
避けられるリスクは極力避ける」

モニターの隅の方で血飛沫が上がっている。銃声は鳴り響いてい
るが、隊員達の叫び声は止まらない。

「 応援は！？ ここは刑務所でしょ！？」

蒼神博士が必死の形相で最もな質問をする。

「 残念ながら……このインペリアムは囚人を収容する一般のソレと
は違い、最小限の刑務官で維持されています」

「つまり……外部からの応援が到着するまで、身動きできないとい
うことですか？」

「申し上げにくいのですが、その選択肢もありません」

「 な、何故です？」

「重要な証人を確実に保護するためには、情報の漏洩を極力避けな
ければなりません。そのため、外部との連絡手段はモニター室の端

「末からしかできません」

「でしたらすぐ、モニター室の担当者に連絡をツ」

「担当者は……現在、モニターの中で死んでいます」

「画面を指差され、絶望感が一挙に湧いてきた。

「そんな、バカな……！」

蒼神の顔色がみるみる青ざめて、イヤな汗が額をじつとりと濡らしている。

「この状況下で言つのもなんですが……どうか落ち着いてください。ここは絶対に安全です」

刑事主任は部下達の手前もあつてか、冷静を装つてはいるが、籠城というのは想定外だった。が、彼は仕事の関係上、この部屋について熟知していた。

「この部屋の外壁には、原子力発電所で使用される防護壁と同じ物が用いられています。たとえ大型航空機が時速100キロで突っ込んできても、防ぎきるだけの強度を誇ります。つまり、侵入者がライフル銃を奪つて撃ち込んできたとしても、微動だにしません」

彼の講釈を聞いて部下の刑事達に安堵がもどる。

「それはそうと……博士、心当たりはないんですか？」

「あ、う……」

ターゲットの名前を力一杯叫んで登場するような危険人物……そんなヤツと知り合いとは言いたくないだろうが、状況からある程度の予想はついていた。

「どうなんですか？」

「お、おそらく、アノの女性は……」

ガギヤン

「ツー？」

聞きたくもない剣呑な音がして、部屋の中の全員が一点を見つめた。つい先程説明のあつた、特別な防護壁から何かが “生えて

いる”。そして……

ガリガリガリガリツツツツ
！！ ガリガリガリガリツ

ツツ
！！

「つおツ！？」

絶対安全なハズの防護壁に、ものすごい勢いで割れ目が入つてい
き、汚い四角形を形作つていく。「コンクリートの破片のような細か
い瓦礫を床にタップリと散らかし……

ドオオオオオオ
ドオオオオオオ
ン！！ ドオオオオオオ
ン！！

「うおおツ！？」

土木用重機が衝突していくような轟音が響き渡り、部屋中がビリ
ビリッと振動する。

「あ、ありえん……！ 一体、何でできている………？」

まさかの超力技。防護壁の性能を凌駕するナイフの切れ味と、女
の膂力。目の前で起きている現実に対処すべく、刑事主任はホルス
ターから拳銃を抜く。他の刑事もそれにならつて銃を構えたが、こ
のまま女不審者が突入してくれば、モニターの中の斬殺体に仲間入
りすることは目に見えていた。

「博士、出入り口まで下がってください」

「え……？」

「見る限り、敵は単独犯です。別セクションに逃げ込めば、多少の
時間稼ぎにはなるでしょう」

「で、でも……アナタ達は？」

「このような体たらくで申し訳ありません。我々はここに残つて出
来る限りの」

「

「うつりやああああああああああああああ
ツツツ！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオ

ツツツン！！」

とてつもなく力のこもった一声と同時に、防護壁の一部が積み木のようにな側へ抜き出される。立ち上る粉塵……その中を人影が一瞬揺らめく。最早、主任の指示を仰ぐ必要はない。

パンパンパンツ！　パンパンパンツ！

9ミリ弾が粉塵めがけて次々と撃ち込まれ、弾が命中する度に人影がゴム人形のように弾む。

「博士ツ！　さあ、早くツ！」

扉のロックが外れる。

「ごめんなさい……ボクは……」

「アレツ？　蒼神博士の声がした」

(　ツ！？)

少女のような幼さの感じる声がして、『敵』はその威容をさらけた。年の頃は20代半ば程で、浅黒い肌をしており、染めてあるのか地毛なのは不明な白髪のミディアムカット。

「あ、博士がいたのだ。じゃあ、すぐに殺しちゃうね」

本人を前にして、屈託の無い笑顔でサラリと宣告する。彼女の表情には何の意図も感じられない。外部から受けた刺激に即反応する昆虫のようだ。

「フ、フリージア……どうして君が、こんな……？」

面と向かって“今から殺します”と宣言する女を前にし、彼の脚は笑っていた。

「畜生がツ！」

パンツ

！

彼等と不審者との距離はわずか。刑事主任の撃つた弾が外れるハズもなく、『フリージア』と呼ばれた女の喉を貫通した。

「げほッ！
げほッ！」

首に紅く小さな華が咲き、女は激しく咳き込んで辺りに血をブチ撒ける。

一
や
た
・
・

首に銃弾の直撃を食らつて倒れないのなら、相手は間違いなく人とはみなされない。そして、彼等警察にそんな“人外”的な相手など務まりようもない。

二。點狀之元素

「バナナを貰うのが何より嬉しい...」

主任 澄昂

卷之三

光刃

「パパがね、博士を殺せつて
ドサッ、ドサッ、ドサッ……」

總殺。

「そ、そんな……『支配人』がボクを？」

ればいいのだ？」

幾つもの斬殺体を積み上げておきながら、根本的な質問をされた。博士の表情が恐怖とはまた別の感情で曇る。それは相手に対する哀れみのようにも見てとれた。

「フリー・ジア……君の足元に倒れ、血を流して動かなくなつた人達がいるだろ?」

「うん、いるね」

「これが人を“殺す”ということなんだ」

彼はとつても大切な事を教えていた。女は自分の足元に転がる刑事の死骸を、足のつま先で突つつく。もちろん、反応は無い。初めて目にする生き物を観察するよつた女の目つき……その瞳は瞬く間に潤む。

「は、博士え、博士え……動かないよお！ 何にも言わないよお！」
女が泣き始める。刑事達の死を完全に無駄にする涙がボロボロ流れ出る。

「そう、これが“死”だ。フリージア……君がしたことだ」
彼は泣き出す女に対して、とじめをさすかのように毅然と言い放つた。

「うつ……うつ……うわあああああああああああああああああん！…」
号泣。

「博士が死ぬのやなのだああああ～～ッ！ 殺すのやなのだあああ～～ッ！」

とうとうその場にしゃがみこんで泣きじゃくる始末だ。
「フリージア、こっちを見て」

そう言つて博士はその場にゆつくりと体を沈め、何の脈絡もなく倒れこんで動かなくなつた。

「…………博士？」

唐突な出来事に泣くのをやめた女は、鼻水をすすりながら彼に呼びかけた。

「…………」

が、応答は無い。

「し、死んじやつた……博士が死んじやつた……！」

女の顔色がみるみる青ざめる。冷静に状況を把握できていない彼女にとって、目の前で起きた現象は、あまりに残酷な仕打ちにも見て取れた。

「…………」

本物の死体に混じつて、偽物の死体を演じることとなつた蒼神は、

ただじつと息を潜めて成り行きに身を委ねるしかなかつた。

「ひぐつ博士が、ひぐつ死んじゃつた。フリー・ジアが殺しちやつた」

ペタペタペタ……

裸足で歩く悲しげな足音を残し、彼女はついさつき自分が突貫させた壁の穴から出て行つた。

「…………」

嵐が去つた。が、青年はまだ動けそうにない。

（どういうつもりだ？ 彼女を外に出すなんて……）

大勢の人間が死んだ。自分が成そうとしたことに協力した人達が犠牲になつてしまつた。既に危機は去つていたが、彼の肉体はあまりに軽く失われる人命の現実に蝕まれ、しばらくは動けそうになかつた。そして……

1週間後

一人の青年……『蒼神槐』あがみえんじゅは自宅マンションのリビングで悩んでいた。刑務所で起きてしまつた大惨事をきっかけに、蒼神博士は法廷での証言を拒否。それより以後、彼の周囲は静かになつた。直接的な警護をする者はおらず、一日に数回、パトカーがマンションの周囲を巡回するくらいだ。

（ボクのしようとした事は、間違つていたのか？）

彼はPCのモニターを見つめながら自問した。法廷に立つと決めたのは、己の正義に迷いがなかつたから。では何故、今の自分は証言を拒否し、自宅に引きこもつてているのか？ 全てが無駄になつてしまつた。なんとも単純な計算だ。

“個人が組織に勝てる道理は無い”

ただ……ただ一つだけ考えがあった。公の場で社会的な楔が撃ち込めないのなら、非公式の場で攻撃する。つまり、原告本人が直接調査に乗り出すのだ。ただし、単身乗り込んだりすれば、自滅することとは目に見えている。先日のような事例がある以上は『護衛』が必要。そこでどうする？

(そろそろか……)

彼は時計を見て、胸に秘めた微かな期待を膨らませていた。『イレギュラー』ネットで発見した調査会社のサイトだ。TOP項目にはこう説明されていた。

〈個人を対象とした総合調査会社。警察OB・元軍人・情報機関出身者等で組織され、企業やそれに付属する団体、宗教組織、暴力団等からの警護、または直接的及び間接的な調査を目的とした、自治体公認の企業〉

……とある。一般的メディアでは聞いたこともない社名だったが、自分がこれから相手にしようとしている連中の事を考慮するなら、備えは必要。

ピンポン

来た。

この瞬間から彼の反撃が開始される。昨晩、腕利きのエージェント一名をよこすとメールがあつた。なんとも心強い。どんな屈強な男達が来てくれたのか。

ガチャ！

「…………」

「…………」

「…………」

街路樹でセミが鳴いている。ドアの向こうに看護婦と医者が立っていた。

「…………」

ミーンッ！ ミーンッ！

状況が上手く説明できないが、目の前に白衣の天使と女医が立っている。

「…………」

ミンミンッ！ ミンッ！

三人はいつまでも見つめ合っていて、何もしゃべらない。

「…………」

「…………」

バタンッ！

蒼神博士は仕方ないんで玄関戸を閉めた。力強く閉めた。

ドンドンドンッ！ ドンドンドンッ！

「すみません！『イレギュラー』から派遣されたモンです！…
「ウソじゃないですよー！ 社員証もありますから開けてください！」

ドアを叩きながらそう言いつるもんと、彼はもう一度開ける。

「…………」

「…………」

無言。

看護婦の方がラジカセを持つてゐる。再生ボタンを押した。流れで

きたBGMは『ラジオ体操第一』。

バタンッ！

閉めた。

「わーっ！ 待って、マジで待つて！ こつから真面目だから！

ホントに真面目だから！」

「デンシ！ デンシ！ デンシ！」

そのまま放つておくと玄関口の前でいつまでも叫んで、御近所から身に覚えの無いウワサが出やつなんで。

ガチャ

「とつとと入つてください」

彼の戦いが始まった。

ナースと女医

速報です。昨今懸念されていた政府直轄の国営企業、通称『PFRS』^{リス}で発生したとされるバイオハザードについて、PFRS側は「事故が起きたという事実は無い。職員による誤報である」と、変わらず事故を否定。政府は来週にもPFRSの幹部立ち会いのもと、公式調査を実施すると発表。今回の調査では……

テレビが毎日ニュースを放送している。蒼神博士はリビングのソファに来客者一名を座らせると、冷茶を一杯出してやった。

「あの～……一つ聞いていいですか？」

「はい、どうぞ」

「その格好は何ですか？」

ものすごく切実な質問をしてみた。

「看護婦です」

「女医です」

呼称についてはどうでもいい。

「……どうしてそんな格好を？」

「趣味です」

「右に同じ」

ダメだコイツ等。

「これ、社員証です」

そう言って偽ナースが、顔写真付きのカードを一枚取り出して見せた。

「イレギュラー調査課エージェント・『汐華咲』さん？」

「はい、今年で18歳になりましたッ！つまり、ポルノ解禁ッ！」
ポルノ解禁はどうでもいいが、未成年がこんな仕事してていいのか？

「いらっしゃいぞーぞー」

女医も社員証を手渡した。

「イレギュラー調査課エージェント・『柏木茜』さん?」

「はい、咲チャンとコンビを組んでる19歳ッ！　『スチュームは手作りですッ！』

そう言って一ヶコリ微笑んでいる始末。

「えへへ、すみません、ちょっと確認しておきたいんですが

「メールには“信頼のおけるヘリテージを派遣します”と返信があります。たんですけど」

「やっぱ見えないと？」

「ええ、まあ……」

はい 確かに 嘴ノリですか？

「そ、それって詐欺じゃないですかッ！」

「申し訳ないー、あたし等どうしても仕事が欲しくてー。」

上場の日で海外の口コミサイト翻訳でたら偶然 蒼神さんのス一
ルが届きましたH。これはチャンスとばかりに.....あはははははは
はつ
」

決して笑い事ではない。

「那のことを靈語にて御聞か」

おふツ！？

席を外そうとする博士めがけて、看護婦と女医がタックルして
きた。

「嘘ついた事は謝ります！ あたし達はただ、デスクワークとサヨナラして外に出たかつただけなんです！ この支配からの卒業なんです！」

言つてゐるコトは全く理解できないが、どうも面倒な話になつてき

「御一ノ所近人」

「いえ、入社して2年近くになります。けど、調査の仕事はこれが

初めてです

「……はい？」

「エージェントのライセンスは持つてるんですが、補欠なんですか

「そーなんです。ギリギリなんですね」

「えらいコトになってきた。しかし、今ここで追い返そうとすれば、

「大声出して人を呼びます」と言わんばかりのツラなんで、黙認するしかない。

「そ、それでは改めまして……蒼神槐です。宜しく御願いします」

彼はそう言つてテーブルの上に書類の束を広げた。一番上には証明写真の貼られた博士自身の履歴書が。

「なんとッ、このツラで23歳！？ てつきりあたし等とタメぐらいかと！」

「身長は？ 体重は？ 血液型は？」

「ワイワイ、ガヤガヤ……

一人は履歴書の写真を指差し笑つて、肘ついて。文句言つて寝転がつて、屁えこいたりで相談中。

(……これでいいんだろうか?)

宣しくない汗が博士の顔面より吹き出す。なんだかもうヤケクソまで秒読みだ。

5分後

「んッ！ よし、決定！」

「な、何がですか……？」

「本日より『童顔』——と呼びます

ニックネームが出来た。

「い、いや……そんなことよりですね、ええっと……そうだ、テレビを」

仕事の話が微塵も進みそうにならないんで、彼はPCをテレビにつな

『さあ、モニターを見るよう促した。

「職歴に記されてある通り、ボクは『PFRS』本部の元職員です。PFRSで現在起きているバイオハザードについては、御存知ですかね？」

「知らんッ！　あたしは基本的に深夜アニメしか観ないッ！」

ナースがやたら偉そうに胸を張つて返答する。

「コレって確かに……海の上にある如何わしい施設で、マスコミにボコボコにされる秘密組織だよ」

微妙にズレてはいるが、女医の方はまだ常識があった。

「ボクは1週間前、PFRSに対して法廷で証言するハズでした。あそこで一体、何が起きているのか、一部始終を世間に公表するつもりだった……しかし、挫折しました」

「さあてえ、な〜〜にがあるかなあ？」

ガチャ

クライアントが真剣に話し始めた途端、ナースはキッチンめがけて這い出して、冷蔵庫のドアを勝手に開けたりして。

「ボクは一介の科学者に過ぎません。軍部とも繋がりのあるPFRSと本気で渡り合つには、武力も必要であると悟りました。だから、御一人には護衛としてPFRS本部まで一緒に来て欲しいんです」

モニターに映る海上の巨大建造物……テロップには『PFRS本部施設』の文字が。蒼神博士は真剣な表情でモニターをビシッと指差した。

「おおッ、肉だ！　しかも国産牛肉だ！　あたしの勝利だあああああああッ！」

何に勝ったかは知らんが、冷蔵庫に上半身を突っ込んでナースが喚いている。

「ええっとですねエ、まずはコレに数字を書いて欲しいワケでして、はい」

そう言って女医が紙切れを一枚取り出し、博士の前に差し出した。紙切れには『給与明細書』と書いてあった。手書きで。

「……ギャラですか？」

「いかにも」

「いや、でも……成功報酬は調査が完了し、必要経費が明確になつてから請求書が送られてくるとサイトに……」

「えへへっと、うちの上司はこの件もちろん知らないワケで、バレると解雇。で、博士と仲良く契約。現金直接プリーズ」

要するに詐欺だ。

「不勉強で申し訳ないんですが、一いつこう調査一連の相場つて、幾らほど……？」

「相場？ んんッ？ ねえーッ、咲チャーンー！」

トントントン、グツグツ、ジュワアアア……

キッチンの方から手際の良い音が聞こえてくる。

「何じやいー？」

「わたし達の仕事つて、幾らぐらもらえるのかなア？」

「こりや！ 子供がお金の話なんてするもんじゃありませんッ！」

それよりこっち来て手伝いなさいッ！ 今日のランチはステーキだぞッ！」

今からでも遅くない、通報しよー。博士は心底そう思った。

く今回派遣される調査班には、情報機関の関係者が含まれているとの報道もあり、極秘裏に開発された、BC兵器による事故の可能性も視野に入れているのでは、との声もあります。PFRSのオーナー・『魅月紫苑』みづきしづかん 氏が昨日行いました、記者会見の模様をご覧ください

攻撃的で鋭い目つきをした、顔色の悪い男性がモニターに現れる。50代前半くらいだろうか、徹夜明けの営業マンみたいにスーツをヨレヨレにしている。

く皆さん御存知の通り、PFRSの本分は新薬開発のコンサルタン

トと軍用兵器の設計であります。マスクの間で流布されている正体不明のウイルス漏洩や、軍部の陰謀説などは事実無根です。PFRSは創立から20年程の若い企業のため、社会的に至らない箇所もあるかもしませんが、国民の皆様に貢献できるよう、日々努力しております>

<先日の元職員による告訴撤回に関しては、どう御考えですか？>
<企業が大きくなれば、必然的に賛同者と反対者の区別が生まれます。己の無知蒙昧を棚に上げて、企業を批判する輩はいつの世にも後を絶ちません。今回はその愚かな輩が、ギリギリで自分の過ちに気付いたという次第です。もちろん、法廷に立った場合、我々は徹底抗戦する準備ができます。正しい者は決して逃げ隠れしない>
記者達の質問に対し発言する中年男性は、自信に満ちている。

「この男がPFRS本部における元上司です」

博士は溜め息まじりに呟いた。

「フムフム。つまり、この不健康そうなオヤジが敵のボスか。モグモグ」

テーブルにはステーキ定食が一人前。家主の同意は無視。
「『敵』って……ボクはただ、PFRSの隠蔽体質を糾したいだけです。直接的な交戦なんて考えてません」

というより、この一人に一流SPのような働きを期待しても仕方ない。PFRSのバックには軍部がいる。物理的交戦となれば、特殊部隊の一個大隊くらいは必要になるだろう。

<今回の告訴内容についてお聞きしても？>

記者の一人が核心に迫る質問をした。

<告訴の内容については彼女に詳細を説明してもらいます>
カメラが移動して、魅月氏の隣に座る白衣姿の女性を撮る。

ブウウウウウウウウウウ

ツツツー！

冷茶を飲んでいた博士が盛大に吹いた。噴射の反動で仰け反った。

虹が出来た。

「こりやあああああッ！ 食事中に行儀の悪い子だねえ！」
ナースがプリプリ怒つてゐる。

〈告訴の件に關しましては、原告側との和解が成立しております。

本件は軍内部の情報が扱われているため明言は避けますが、今後は軍部の広報より隨時皆様に御報告があると思われます〉

房状の後れ髪が特徴的な黒髪のポニー・テールで、フォックスタイルの赤縁眼鏡をかけている。テロップには『PFRS上級職員・34歳』と出ており、名前は何故か伏せられていた。

〈軍部の機密事項に該当するということですか？〉

〈そうです〉

〈責任者はどなたですか？〉
〈私からは御答えできません〉

名無しの美女は記者の質問を突っぱねる。蒼神博士はやりきれない表情で、テレビの電源をオフにした。

「ボクのIDは当然もう使えません。つまり、PFRS本部に潜入するワケですから、政府施設への不法アクセスの罪で逮捕されます。それを踏まえた上で判断していただきます……同行できますか？」
正直なところ、この二人には来て欲しくない。手違いとはいえ、こんな未成年の女の子に犯罪の共謀者という履歴を加えたくない。だから、博士はトドメに言及した。

「1週間前、ボクはPFRSが送り込んできたヒットマンに襲撃されました。武装した刑事達がたくさん殺されました。ボクはこうして運良く難を逃ましたが、次も上手く回避できるという保障はありません……それでも一緒に来てもらえますか？」

誇張しているつもりはない。事實をありのまま真剣に述べた。

「えッ……人が死んでんの？ ええっと、それはちょっと……ねえ？」

「アハッ、ハハッ……補欠の初仕事にしてはハードかも（汗）」

二人は微妙に気まずい空氣を漂わせ、目を見合させている。

「どうされますか？」

彼は矢継ぎ早に追い立てる。

「え？ あ、ああ……ちょっと」と「めんなさい。事務所に戻つて上司と相談してみます」

「そ、そうだよね……契約書類も持つてきてないし……アハツ、アハハ（汗）」

両エージェントは引きつった笑顔で立ち上がり、玄関の方へと後退していく。

「あの～～～上司に経過報告を入れなきやならないんですけど、明日はどうちらに？」

半開きにした玄関戸から、顔だけ出してナースが問い合わせた。「東部ベイエリアの港に行きます。ソコから密船に乗りこみます。周囲に一般人が多ければ、先方もあからさまな行動には出られないでしょうし」

「そうですか……じゃあ、また！」
バタンッ！

帰つた。

「さて……と」

博士はもう一度テレビの電源を入れ、モニターを見つめた。記者会見のニュースはまだ続いているが、オーナー・魅月氏と白衣の女性の姿は無く、広報の人間がつまらない言い訳で凌いでいる。

「結局、ボクだけか……」

孤独な戦いへと前進する決意をかためた。

シスターと神父

翌日

ブオオオオオオオオオオオオオオ～～

のんびりとした汽笛が聞こえる。潮風に乗った海鳥が太陽の下で輪を描き、青空の中を優雅に泳いでいる。正午……初夏の堂々とした陽射しを受け、港では出航を控えた巨大な船が泊まっていた。『サテュロス』と呼ばれる巨大豪華客船で、メインデッキの温水プールでは、Tシャツ・短パン姿の蒼神博士がパラソルの陰に隠れ、デッキチェアに腰を下ろしてラップトップを立ち上げていた。

『神の設計図』における検査結果

ディレクトリーの一つをクリックする。

記述者不明……神の設計図より抽出されたタンパク質は、数十のアミノ酸配列により一次構造を形成しており、二次構造は、他の動植物に見られる筒状構造とも板状構造とも似ておらず、三次構造において、ある程度のパターンが見受けられるが、未だに類型化には至らず、構造と機能の相関はハツキリしていない

記述者不明……神の設計図より抽出されたタンパク質を使用して、臨床実験を行う。何度かの実験により、以下の特質を発見。1・動物実験は全て失敗したが、人体実験はわずかながら成果を収めた。
2・生存する被験者は、皆同様にその肉体機能を画期的に向上させた。特に免疫機能は秀逸。物理的ダメージ・高熱・寒冷・細菌・ウイルス・毒物等に対する抵抗力は、常人の数倍。3・このタンパク質を培養することにより、新しい生命を確認。原始生命に酷似した

成長パターンを経て、多細胞生物に変化>

<記述者不明……神の設計図を管理する海底エリアの監視モニター
が、異常を確認。特定の上級職員との接触の際、原因不明の振動現象が発生。電気的な反射と思われる>
バイタルズ

<記述者不明……軍部より極秘のアクセス有り。神の設計図を軍のP4施設にて預かりたいとの依頼。私は反対した。一部の組織が秘密裏に所有して良い物ではないと判断。協議の末、極地に研究施設を整え、隔離するという決議案が採用される。これは軍上層部から紹介された将校からの提案で、建設費用の全額負担を申し出たらしい>

「コレのせいでボクは職を失つた……」

彼は短い黒髪をガシガシとかき上げて目を細めた。これから自分が成そうとしている事を、常に心の中で自問し続けなければ落ち着かない。そんな時間がやたらと増えた。

(ボクは殺されかけた……そう、殺されかけたんだ。また表に出ようとするば、軍が本気で動くかもしれない……拉致？ 殺害？)
ハアアアアアアアアア……

とても重くて長い溜め息が流れた。

(一個人が大組織に勝てるのか？……可能か？)

バタンッ

PCを閉じた。面前に広がる自分とは無関係な光景に溶けてしまったかつた。

水着のセレブがはしゃいでいる。

プールサイドを無垢な子供達が走り回る。

日光浴に、彩色豊かなソフトドリンク。

デッキブラシでせつせと掃除するスターと神父。

水平線の向こうには……

「て、アンタ等何やつてんですかッ！？」

鼻息を荒げる蒼神博士が一人の前に仁王立ち。

「密航ッ！」

二人はそう言った。

「ゴシゴシ……ゴシゴシ……

孤独になるハズの旅に汐華咲と柏木茜がプラスされた。

「何じやこりゃ ああああああああああああああッッッ！？」

バカが一匹、密室で絶叫した。

「ショック・ザ・神の僕！？」

続けて二匹目。

蒼神博士は再会してはいけない連中を引き連れ、自室に戻った。あのまま一人を世間様にさらしてはいけない……そんなオトナの真心から。で、入室するやいなや、冷蔵庫に頭を突っ込んでいるのが汐華咲（何故かスター姿）。身長は160センチ前後くらいで、非常に短く切りそろえた黒髪が特徴的。衣装のせいで体格はよく分からぬが、スリムっぽい。一方、寝室のマットレスを寝転んで吟味しているのが柏木茜（何故か神父姿）。背丈は咲より頭一つ分くらい高く、栗色をしたミディアムの姫カット。衣装の上からもハツキリ分かる腹部ポツコリさん。体脂肪率は40%くらいありそう。

「…………で、どうして密航なんか？」

「ぬッ、神々しい生肉を発見！ ダイレクトにいつてくれるー」

「ふにゃー、たまんないー

人の話を聞け。そして、牛肉に塩をふるな。

「会社に報告しなかつたんですか？」

「しましたよ。きつちりと」

「じゃあ、どうして！？ 死人が出ているんですよーー」

「上回からは“だつたら死んでこい”って言われました

「……は？」

「つまり、死にに来ました」

開封済のワインボトルを握り締めながら、シスターが胸元で十字を切る始末だ。こうなつてしまつては、この二人同伴でP.F.R.S.本部へ潜入するしかないワケで……。

「いいでしょ！ こうなつてしまつた以上、今からボクはアナタ達の正式なクライアントです。よつて、ボクの言うことは絶対守つてもらいますッ！」

ゲフフ
ブツ
……

ゲップはするし屁はこくし、最低の返事が返つてくる。

「まず一つ！ ボクの指示なくして勝手な行動をとらない！」

ビシツと人差し指を突き出して一喝。

「一つ！ 御一人にはP.F.R.S.本部の手前で本土に帰つてもらいます！」

ビシツと一本目の指を立てる。

「神に誓つて！」

「右に同じ！」

うわああああ………… ロイツ等、約束破りたくてウズウズしてる。
(巻き込んだのはボクだ……責任は負う)

彼は人並みに保護者としての責任に似たモノを感じていた。

「そういえば、ギヤラの交渉が途中でしたね」

旅行カバンの中から財布が取り出された。ブ厚い。札を入れる部分がやたらブ厚くなつていて。援交っぽい画になつてなんかイヤラしい。

「スゴイよ咲ちゃん！ お財布がピッヂピチで苦しそうー。」

「おのれッ、この非国民めッ！」

床に正座して、天に両手を差し出しつつも文句をたれるシスター。

「ええと…… そういえば、幾らくらい払えばいいんでしたっけ？」

「スマセン、質問があります」

質問したら質問で返された。

「はい、何か？」

「大きな数字つてよく分からないんで、物に換算した場合…… 上力ルビ何人前食える？」

「執事喫茶何回通えますウ？」

そんな価値基準でいいのか？

「……では、依頼料の件は後日イレギュラーと交渉といふことで」

力チャカチャ、カタカタ……

蒼神博士はPCをテレビにつないだ。

「よく観ていってくださいね」

テレビモニターに映し出されたのは、海洋に浮かぶ正方形形状の巨大な環境都市。その中央には、黒光りする高層ビルがそびえ立っている。

「当時はまだ実験段階だった『マリンコロニー』のシステムを導入し、PFRSは4年かけて建造されました。資金の殆どを軍部がバツクアップしているため、全ての設備が軍仕様で、テロリストやハッカーへの対策は万全。海上・空域ともにレーダー探知されており、認証コードを持たない所属不明の機体が接近すれば、即座に軍へ通報されます」

「あたしの知り合いに、『夜のレーダー技師』って呼ばれているヤツがいます

そりゃ ただのストーカーです。

「かと言つて、海中は広域海底火山の影響で巨大な岩が出つ張り、潜水艦による接近も難しい」

「わたしの知り合いに、『夜のソナー技師』って呼ばれているヤツ

がいます

そりやただの盗聴マニアです。

「そこでボクの立案した作戦ですが、PFRS本部から最も近い港には、メンテナンス用の海底トンネルが本部の発電施設までつながっています。そこを歩いて行きます」

「はいはーい、警備とかは?」

「問題ありません。海底トンネルの存在は、政府が契約する特定の業者と、一部の上級職員しか知りません。ただし、ボクのエロはどうせ使えないんですけど」

「つまり、あたし等は海底トンネルの出口まで付き合えばいいって」「ト?」

「でもオーー、IDが無効つてことは入り口で立ちんぼ?」

「大丈夫です。政府指定の業者の一人が、ボクの話を聞いて協力してくれることになります。港で落ち合つ予定です」

「彼の心中で、まだ弱々しかった決意がギュッと引き締まつた。」

「で、具体的にPFRSとやらで何が起きてるんですウ?」

「神父もワインのボトルを発掘し、それはもう手慣れた感じでグビグビグビッ。」

「このバカ!..」

ばしつ

「あうツ!」

シスターが神父をぶつ。そして、小芝居。

「飲酒はハタチを過ぎてからって、いつも言つてるでしょ!..」

「『ごめんなさい……わたしが間違つてた!』久しづりの合法的な食事につかれてた!」

ヒシッ

抱き合つ醉つ払い共。シスター、オマエも未成年だぞ。

「PFRS本部ビルのP4施設で、バイオハザードの一種が発生しています。職員十数名が、正体不明の『何か』に感染しました。本部はその事實を隠蔽しているのです」

蒼神博士は面前の小芝居をバツサリと無視し、話を進める。

「それ以外にも、国外から不法滞在者やホームレスを拉致し、違法な人体実験を行っています。私も立ち会ったことがあります……遺体は溶解処理され海に流される。被験者の個人情報は、この世から全て消されます」

「ほう、そりゃけしからんな」

腰に両手をあてて窓から大海原を眺めるシスター。その背中は堂々としている。酔っ払ってるけど。

「バイオハザードの原因は、『神の設計図^{バイタルズ}』にあると推測しています」

モニターに映される怪物体。

「ばいたるず？ 若手か？」

芸人ではありますん。

「『神の設計図^{バイタルズ}』とは……20年前、現在のPFRS本部が位置する海域にて、地殻変動により海底から吐き出された正体不明の遺物です。人間の造形と酷似していて、半透明の全身には人体を構築する組織全てが正しい位置に在り、電子顕微鏡を使用してはじめて確認できる、微細な箇所まで正確に造られています。つまり、『人類の完璧な標本』いえ、コレを最初に精密検査した科学者は、

“人類を創り出すための完璧な設計図”と考えました

モニターに映った怪物体をジッと見つめる咲と茜。そして、感想。

「男？ 女？」

「大人？ 子供？」

特にどうでもいい様子。

「先日も申し上げましたが、ボクはヒットマンの襲撃を受けました

……この船も100%安全というワケではありません

「はッはッはッ！ そのためのあたし等です！」

「博士の盾となり武器となり、情婦となりますウ

結構です。

優雅な船旅と喧騒の予兆

「で、博士は自分の元職場をどうしたいわけ？」

シスターは相変わらず腰に両手をあてて、大海原に視線をやつていて、何だか背中が大きい。

「間違いを正したいんです」

彼は実に分かりやすく断言した。

「何で？」

「……え？」

予想外の切り返しに博士が唖然とする。

「PFRSは国が管理する正当な研究機関なんです！ それを一部の職員が私物化して、違法な実験を行うなど以外です！」

博士は身振り手振りもまじえて熱く語る。

「要するに“白”という正義があつて、“黒”という正義とぶつかつてる。お互いが正しいと言つて譲らないわけだ」

「PFRSの非道に『正義』なんかありません！」

「使われない核兵器に悪意は無し。例え使つたとしても、爆発の瞬間や死体の山を撮つた映像を確認しない限り、人は『悪』を定義しない」

「閉鎖的空間の中で行われた暴挙は、公に認識されなければ『悪』ではないと！？ 那は違う！ 悪意は確かにソコに存在しています！」

咲の物言いに対し、蒼神博士はつい向きになつて声を荒げた。

「まあまあ、落ち着いてくださいなア 咲チャンちょっとびり酔っちゃつてるんで」

「そのと一いつじやー！ 優美として除湿剤に溜まつた聖水を頭からかけてやるつづー！」

「やめてエエエエー！ 楽しいけどやめてエエエエー！」

バタバタバタ……

(ボクは何に負けたんだろう?)

命を狙われた。政府機関を敵に回した。さあ、示そう。自分こそ
真の『白』であると。

「博士 ッ!」

「えッ? あ、はい……」

いつの間にか金属バットを片手に構えたシスターが、元気良くて
ライアントを呼びつける。彼女の足元には神父が倒れてたりするし。
頭部から流血してたりするし。

「あたしもう飽きたッ!」

そう言つてバットをブンブン振り回す。

「……あ、あの～～、ここから更に重要な説明を……」

「主は申されましたッ! エロゲーにオチはいらんとッ!」

ドコの主だ。

「要約するとですね、わたし達ボディガードは右脳も左脳も使わな
いから別にイイじゃん……ってトコロですウ

血みどろの神父が笑顔で言及。コイツ等、やっぱダメだ。

「……それじゃ、メインテッキのプールで遊んでてください
彼は週末のお父さんみたいな声をもらした。

「そいつは無理だ! 水着が無い! 以上ッ!」

バタンッ!

そう言い残してシスター、退室。

「わたしは一応、水着持つてますけど……でも、きやは」

バタンッ!

謎のリアクションで神父も退室。

「あの……ボディガードは?」

一人とり残される始末。博士は仕方ないんで、ギャラリー抜きの
説明を続ける。

<午前・10時24分> モニターに映るのは監視カメラの映

像。巨大な水槽の中に佇む神の設計図^{バイタルズ}。その前に立ち尽くす蒼神博士の姿。

（有機物の塊…………しかし、動力源は？　脳の一部で何だかの電気信号を確認したが……）

口元に手をあてて、モニターの前で考え込む博士。そして

「ジカン・ヲ・ムダ・ニスルナ。ハヤク・ミツケ・ロ」

しゃべった。バイタルズ人体模型が口も動かさず言葉を発した。

（「見つける」？　一体、何のことだ……？）

カコツ

キーを打つてファイルを閉じた。とにかく情報が足りない。いざれにせよ、本部への潜入なしには回答は得られない。彼は深く息を吸つて目を閉じた。

で、その日の夕方から夜にかけて

廊下で金属バットを振り回し、子供達を追い回すシスターを見かけたり。神父がバスルームから卑猥な声を発してたり。メインデッキで牛丼を立ち食いしているシスターを見かけたり。神父がキッチンで焚き火をはじめて警報が鳴り出したり。船尾でゲロ吐いてるシスターを見かけたり。神父が酔った勢いで首吊り自殺をはかつたり……蒼神博士の孤独なようでやかましい船旅の1日目が終わろうとしていた。

「あ、あの……茜さん……」

「なんざましょ？」

「クライアントの立場から言わせてもらいますが、ソコはボクのベッドです」

夜も更け、乗客の皆様が就寝しだす頃となり、博士はビシッと文句をつける。

「はいはいそーですとも。さあ、ビーぞ」

茜はベッドの上に寝そべって博士を誘う。

「いや、そうじゃなくて……どいてください」

「ひどいッ！ 体脂肪率の高い女の子をベッドから引きずり出して、
寒空に放り出すおつもりッ！？」

真夏です。

「ソファじゃ駄目ですか？」

「ダメ。わたしの様な乙女は、高級マットレスを使ったベッドで寝
ないと爆死します」

そんな乙女はいません。

「と、とにかく……色々とマズイですからどうしてください…」

蒼神槐・23歳、赤面。

「い、や、だ、よ、～～～」

「……よく分かりました。ボクがソファで寝ます」

クライアントが寝室から追い出された。スコス音と撤退する博士
の後ろで、快適さにのたうちまわる茜。

(……ん？)

彼は妙な光景を目にした。リビングの片隅で壁を背にして膝を折
り、背中を丸めて座り込んでいるシスターが。

「何をされてるんですか？」

「あたしも寝る」

「そんなトコですか？」

茜とは違い、まだコスプレもしたまんまだ。

「博士H～～、咲チヤンのJとは気にならないでH～～」

マヌケな声がそう告げる。

「そうやつ、気にしない。ひとつと体を休めてうつよーだい。あたし
やもう眠り……」「もう眠り……」

カクツ

首がうな垂れ、すぐに微かな寝息が聞こえだした。寝つきが良い
といつより、まるで即死だ。

ピッ

照明を落とす。部屋中に淡い闇が広がる。カーテンの隙間から月光が僅かにもれる。

（疲れた……本当に疲れた……）

蒼神博士はソファの膨らみにその身を沈め、目を閉じた。客船に乗つて予定外の心配事が増えてしまつたためか、心労で意識が溶けるのに時間はいらなかつた。豪華客船のあらゆる箇所から、灯火が消えていく。とても静かに消えていく。船底にぶつかる細波から、海中の生物達の寝息まで聞こえてきそうな夜。

潮風が……止む。

「すううう……すううう……」

10分も経たない内に、客室は三人の寝息ですっかり満たされた。いた。殆どの客室で、成金共が心地良い夢の中にトリップしはじめた頃……

ヒュンヒュンヒュンヒュン

夜の帳が震えだした。金属の羽が大気と薄雲を裂く。

ヒュンヒュンヒュンヒュン

へりだ。民間用でも報道用でもない。かといって、攻撃的な装備も見受けられない。

ヒュンヒュンヒュンヒュン

とても静かに飛んでいる。チューングアップされた無音へりだ。へりはゆっくりと高度を下げはじめ、客船の真上に位置をとる。

ヒュンヒュンヒュンヒュン

メインデッキのプールの水面に小さな波を作りながら、ヘリポートへ着陸した。そして、降り立つ者。数は四人。出迎える者などダレもない。ダレもこの来訪者達に気付いていない。乗客然り、船員然りだ。四人は一言も発さず、辺りを見回している。全くもって

静かだ。人も海も月も、善意も悪意も、等しく墮ちて。

蒼神博士はクツシヨンをしつかり抱いて。

茜は満足感あふれる笑みをこぼして。

咲は

「……さて」

動。

強襲者と迎撃者

「こちらチーム・、到着した」

〈了解。行動に移れ〉

ヘリから現れた内の一人がインカムで応対し、他の三人に目配せする。四人とも真っ黒なスーツにサングラス。しつかり磨かれた革靴に地味なネクタイ。男性二人に女性一人のチーム。ヘリはすぐに離陸し、インカムをつけたキンヘッドの男が、上着の内ポケットからPDAを取り出した。

「博士の部屋は？」

「4階の410号室よ」

「俺とプリエステスで部屋に向かう。タワーは東口を、エンプレスは西口をおさえろ」

「了解」

「さつさと済ませて帰ろつぜ」

「同感ね」

指示を受けた来訪者達が散開しようとしたその時。

「えいめ～～～ん」「

ツ！？

彼等の死角から彼等意外の声がした。四人が振り向いたその先…
…ヘリポートの隅っこに佇む影が一つ。右手を真っ直ぐ真横に伸ばしてしゃがむ、不吉な人影。

「……ダレだ？」

「神の下僕」

薄雲が裂けて淡い月光が降り注ぎ、その姿を称える。
汐華咲が　　そこにいた。

「う……んんん……？」

不意に差し込んできた月明かりに田を射られ、ソファに横たわる蒼神博士がゴシゴシと田をこする。

「…………ん？」

彼はムクリと上半身をもたげ、半開きの田で辺りをキョロキョロ見回して　　パタツ。

再眠。

「我々はPFRS本部より派遣された者だ。危害を加えるつもりはない」

「PFRS？　ほほり……つまり、クライアントの『敵』ってワケか」

シスターの眼光が不敵に輝く。

「もう一度聞く。貴様はダレだ？」

チームリーダーと思われるスキンヘッドの中年男が、毅然として立ち塞がる。

「神に仕えし敬虔なる尼僧に対し、攻撃的意志を察知ッ！　主は御許しになりませんよッ！」

会話になつていない。

「エンプレス、拘束しろ」

「いいの？　相手はマヌケな民間人のようだけど」

「構わん。本部には俺から話す」

「はいはい、了解」

額にバンダナを巻いたブルネットの女が、咲に歩み寄り肩をつかんだ。

「さあ、来なさい」

「断じてイヤです」

「痛くされたいのかい？」

「罪深き者よ、悔い改めなさい」

ドゴッ！！

「 ッ！？」

人間の体に何か硬い物体がぶつかるような音がして、『エンプレス』と呼ばれた女の体が宙にブワッと浮き上がり、そのまま地面に叩きつけられた。

「 ……どうなつている？」

一瞬、他の三名が息を止めて固まる。シスターが生脚ムキ出しにして中段蹴りを放ったから。

「タワー、手伝つてやれ。ただし、銃は使うな」

「ああ、分かつてる」

今度は『タワー』と呼ばれたロングヘアで長身の男が歩み寄つて行く。その間にも一撃を食らつたエージェント・エンプレスが、ムクッと起き上がる。

「調子はどうだ？」

「やかましいッ」

エージェント・タワーの揶揄を振り払い、目標めがけて正拳突きを放つ。シスターは右手でソレを払いのけ、矢継ぎ早に繰り出された頭部への回し蹴りをしゃがんで避け、その姿勢から水面蹴りを放ち、相手をまた転がす。

「このガキがッ」

転がる仲間の脇を通り過ぎ、タワーが素早く咲との間合いをつめると、下段から中段へとつながる連続蹴りを繰り出し、咲の両手を防御に使わせ、一瞬の硬直時間をついて飛び込み気味のパンチを突き出した。

「ゴッ ！」

「 どくどくよ？」

シスターの高々と上げられた膝がパンチを受け止める。タコみたいに柔軟なボディだ。

そして、反撃。

ドゴッ

！

「くつ……」

防御に使つた脚をそのままの高度で素早く伸ばし、つま先に力をこめて相手の喉に突き込んだ。タワーは2、3歩退いたが、バカにするようなシスターの仕草にイラついて、無造作に飛びかかる。シスター、反転。体をストンッと落とすようにして地に両手を着き、絶妙のタイミングでカンガルーキック！！

「おぐッ！？」

まともに命中し、背広をクシャクシャにしながらタワーも転倒。「行くぞ」

今度はスキンヘッドの男と、ドレッジドロップクスの『プリエステス』と呼ばれた女性エージェントが動く。

「来いよ来いよ来いよ来いよッ！」

挑発しつつシスターは回れ右ッ！ そしてダッシュ！

踵を返した彼女の背を、エージェント二人が追う。走っていくその先にはプール。もちろん ダイブ。

バッシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ツツツ……

派手に飛沫を上げて沈む、沈む、沈む……ブクブク。

「んん……むうう……？」

茜がベッドの上で「ロロロロ」と寝返りをうつ。シーツに巻かれて春巻き状になる。体が締め付けられて苦しい。特に腹部が苦しい。

「ううう……ううう……ふヒいいい……」

脂汗が全身から抽出されて、天然油で揚げ春巻きが出来そつだ。ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ

彼女は渾然とした意識の中で、心臓の鼓動の高まりをハッキリと感じていた。月明かりは茜の顔面にも降り注がれ、不吉な空氣の発

生を伝えよつとしている。

「……………あ」

ガバッ！

起きた。

「エロオオオオオオオオ

い！！」

トテトテトテ

意味不明な寝言を口走り、ゆづくづと歩き出した。

ゴゾゴゾゴソ……

収納スペースから旅行用の特大スーツケースを引っ張り出す。

「あ～～～う～～～…………眠ううい…………」

どう見ても寝惚けた状態。彼女はスーツケースを引きずりながら客室から姿を消した。

ブクブク……ブクブク……

プールを囲む夜間遊泳用のライトがつけられ、飛び込み現場を照らし出す。

「どうするエンペラー？ 手をこまねいでいるヒマはないよ

「…………仕方ない、行くぞ」

スキンヘッドの中年男……エージェント・『エンペラー』は仲間に手で合図し、プールサイドから離れていく。が、エンプレスだけは自動拳銃を抜いて、プールの水面に銃口を向けた。

「よせ、エンプレス」

「どうして？」

「余計な痕跡を残すな

「あんなフザけたガキに…………やられたまま引き下がれるかッ！」

「冷静になれ、バカ者。消音器もつけずに発砲する気か？」

「…………つ、分かつた……」

パシユツー！

「なツ !?」

エンプレスがプールの水面から視線を逸らしたその瞬間、彼女の親指が千切れ飛んだ。

「くうあアアア！」

拳銃が地面に転がり、垂れ落ちる血が赤黒い華をつくる。

「何だツ！？」

数秒遅れて他の三人が事態の異常に気づき、一斉に拳銃を抜いた。

「何時だと思つてんのよオ～～～～～」

遠くの方に放置されたデッキチェアに人影が。目を「ゴシゴシしながら文句をたれる神父様、柏木茜その人。手には消音器付きの自動拳銃マチックが握られていた。

「プールに沈んだガキの仲間か！？」

「え～とね……わたしは柏木茜ツ！ 19歳の〇型ツ！ 趣味は年下の男の子にエッチな質問してドキドキさせることツ！」

注目された途端に眠気が吹き飛んだらしく、無駄にハイテンション。

で

ズルズルズル……ズルズルズル……

ドコにあつたかは知らんが、神父は地引網を引っ張り出してきて、プールへ投げた。

「…………」

予想外の展開にエージェント達は沈黙。3、2、1、ズーリズリ……手繰り寄せられた網にかかっていたのはもちろん、ズブ濡れのスター。

ビチビチツ、ビチビチツ！

跳ねてる。活きが良い。

「連中を海へ投げ込め」

ハンペラーの合図でタワーとアリエスティスが拳銃を片手に引じり寄る。

「はい、ストップ！！」

綱の中から這い出たシスターが、両手を高々と上げた。

卷之三

タワーとアリエスの両名が思わず足を止める。

「あたし等は仕事の都合上、不審者を船の中に入れたくないで、そっちはうちのクライアントに用がある。」このジレンマを開拓するには……さあ神父様ツ！　言つておやりツ！」

「モザイクは人類の立派な文化だ」「ソヤロー！」

ズブつ

シスターの指が凶器となって神父のデリケートゾーンを直撃。

おふたふふのう（道）

悶絕

「1対1で来な。勝者は船の中へ、敗者は去る」

「貴様等の内訳を守る保管は、

「持こな無」

卷之三

二ノアラ #藤井

エンペラーは拳銃をホルスターに戻し、サンケラスを外して一步前に出た。

「二人とも下がれ」

「了解」

場の空気を察知して、タワーとプリエステスが退く。

一 茜、分かってるね？」

「はいはい。正々堂々だあ～～い好き

パシユツ！ パシユツ！

「 ッ！？」

タワーとプリエステスが銃弾を食らって続けざまに倒れ伏す。

「 貴様等ツ！？」

“ 特には無い ” って言ったでしょうが、この阿呆ツ

咲はズイツと一步前に出て右手を突き出すと、人差し指でチョイ
チョイと挑発した。

船上の激戦と静かなる監視

「外道がツ」

ガシャ……

憤怒の表情でエンペラーは外したサングラスを握り潰す。そして、彼の両脇では……

「ありやま」

咲と茜が瞠目する。凶弾に倒れたハズのエージェント両名が、ムクリと起き上がった。

「防弾スースかね？」

しかし、胸元からは血が滲み出でいて、ヤシヤツを赤黒く染めている。

ダツ！

タワーとブリエステスは左右に別れて弧を描くように疾走し、一瞬時間をおいてエンペラーが飛び上がり、宙を舞う。これに対してシスターの前に神父が滑り込み、飛び掛つて来るエンペラーを迎撃。9ミリ弾が彼の一の腕をかすめるが、着地と同時に拳銃を蹴り飛ばされる。

「こりやま」

シャツ

袖の中から手の平サイズの予備銃^{バックアップ}が滑り出し、エンペラーの額を狙つた。が、彼のアクションに気を取られた神父の側頭部に、ブリエステスが銃口を「リツと押しあてる。シスターの背後をとつたタワーは彼女を羽交い絞めにする。が

「せいやあアアアアアアアアアア

ツツツーー！」

「うおツ！？」

ブオツ

！

羽交い絞めにされたまま、上半身を8の字を描くようにしてブンブン振り回し、タワーの拘束を力任せに引き剥がしてしまつ。

「そしてええええ！」

無理矢理引き剥がされ、空中に投げ出されたタワーの胸ぐらをガツチリつかみ、巴投げの要領で投げる…………神父めがけて。

「逝けやあああああああッ！」

と、シスター。

「来いやあああああああッ！」

と、神父。

二人の息はピッタリだ。

ドガツ……

神父にタワーが丸」と命中。

「……ゴメンね！」

シスターは気を取りなおして構え直す。倒れてピクピクしてるパートナーはほつたらかしで。

「どうあっても邪魔する気？」

「神様は見てますからッ！」

ダンツ！

カナリ低い姿勢でプリエステスがタックル

速いッ！

「マジっスか！？」

タックルを仕掛けた彼女の背を蹴つて、エンペラーがまたもや宙に舞い、シスターの顔面めがけて突き刺すような蹴りを放つ。これを素早く回避するが、わずかに崩した体勢のスキをついて、プリエステスのタックルがクリーンヒット。

「だあアアアアアアア～～～～ッ！！！」

まともに食らつて背中を地面に擦り付けながらブツ倒れる。

「イタイッ！ イタイッ！ 背中がイタアツイ！ アツアツッ！ かゆいうまー！」

とにかく大変だ。

「このガキめツ」

プリエステスがマウントポジションをとった。

「コレを見なさい」

彼女はシスターを見下ろしながら、自分の胸元をガバッとはだけさせる。9ミリ弾の直撃による生々しい出血……その弾痕めがけて自分の指を突っ込んだ。

グシュグシュ……

「おいおい……」

シスターの頬に血の滴が垂れてきて赤黒く汚す。何の苦痛も感じてないような表情……やがて傷口から。

コトンツ

弾丸が素手で摘出された。

「我々は『ブースト・ヒューマン強化人間』よ」

「ほわつづ？」

シスターに難しいカタカナは通じません。頭がパカリと割れました。脳には“恋せよ乙女”と書かれていました。意味は不明。「特殊な投薬処理で運動能力と免疫機能を人工的に高めた人間よ」「なるほど、なるほど……わかりませんツ！」

「…………」

ガツ！

少々イラつき気味に咲の頬を拳で打つた。

「やりやがったなツ」

シスターの口元が歪んだ。

グイツ！

「うツ！？」

「こんな展開どーよ？」

ネクタイをつかまれて強引に引き寄せられ、お互いの顔面が肉迫する。そして

ガブツ！！

「あぐッ！？」

プリエステスが苦悶の声を上げ、上半身を大きく仰け反らせた。

「せいやつ！」

怯んだところに腰を突き上げて敵を引き剥がす。

「クソガキがアアア……（怒）」

鼻から大量出血。つまり、噛みつかれた。

「野蛮人だーっ、野蛮人が出たぞオオオ！」

ほつたらかしになつてた神父が遠くの方から野次をとばす。

「神を冒涜する子羊には、ちょっと天罰がすこかつたりするよ～～

」

シスター、本気。

「この二人は何者？」

PDAのモニターを見つめながら白衣の女が呟く。モニターには現在、客船のメインデッキで発生している攻防の様子が、監視衛星を通じて送信されていた。

グウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

エレベーターが重苦しく唸つて、ゆっくりと降りていく。海中を垂直にはしつた巨大なシャフトを移動して、海底に建造されたP4施設に到着した。

「…………ふう」

ドアが開いてその先に見える光景に、彼女は俯きかげんと溜め息をついた。検査設備が整つた巨大空間。その中央は海底の一部がむき出しになつて、重厚な強化ガラスで囲まれている。その隔離された海底の一部は砂と岩石が混じり合い、白衣姿の職員が十数名立つていた。ただ……何か様子がおかしい。特に何か調査しているワケでもなく、その場にジッと立つて、時折、ビクリと体をうねらしている。言葉を発することは無く、目も虚ろ。そして、彼等に囲まれるようにして砂地に突き刺さっているのは『人型』。半透明の人の造形に、人間を構成する組織がぎつしりと詰まつたモノ。

「経過報告を」

白衣の女はインカムをつけてボソッと呟く。

〈ある程度の脱水症状は見られますが、脈拍・血压とも正常。ロボットを使った血液検査でも、ウイルス・寄生動物・異常タンパク質・毒物等はいずれも確認されませんでした。人体としては至って問題ありません〉

「目新しい成果は無しか……」

〈はい。ただし、脳波パターンに通常にはない徵候が見られます〉

「どういふこと?」

〈扁桃と海馬の間の神経ネットワークが同時に活性化し、異常な数值を示しています〉

「それは……『恐怖』を感じている?」

〈おそらく〉

「原因は?」

〈今のところ不明です。ただ、神の設計図^{バイタルズ}から一定の『信号』が送られて、大脳辺縁系が受信しているようです〉

「……脳をハッキング?」

〈かもしだれません〉

（くそつ……）

彼女は悔しそうに下唇を噛み、踵を返してエレベーターに。中には5、6歳くらいの男の子が一人……いつの間にか佇んでいた。

「蒼神博士の拉致失敗を想定し、ヘリの準備を」

〈宜しいのですか? 支配人が許可するとは思えませんが〉

「許可は必要ありません」

〈衛星による監視は軍部も行っていますが〉

「結構よ」

白衣の女と少年を乗せたエレベーターはゆっくりと上昇していく。た。

船上の激戦と静かなる監視（後書き）

海馬＝大脳辺縁系の一部。特徴的な層構造を持ち、脳の記憶や空間学習能力に関わる器官。

拉致失敗と誘拐成功

右の突きをヒラリとかわし、左の手刀を手の平ではじき、真っ直ぐ打ち込まれてきた中段蹴りを両手で押さえこんで内腿をつかみ、持ち上げるようにしてブン投げる。

「せいツ！」

強制バク宙をさせられたプリエステスの背中めがけて、ねじり込むような蹴りをブチかます。

「ぐふツー！」

派手にブツ飛び、鉄柵に叩きつけられた。

「悔い改めないと神様泣いちゃうよ～～」

シスターはワインクした。何故かした。

「……どうなつている？」

エンペラーがたじろぐ。ひょこっと現れた近所の悪ガキみたいな連中が、とんでもない障害となつて立ち塞がつっていた。
(ならば……)

彼は神父の方をキツと睨みつける。

「ええ～～～マジでエエエ～～（汗）」

相方に見捨てられてふて寝していたが、面倒臭そうにウネウネと這いだす。

ダツ

エンペラーは顔面の前で両腕をクロスし、防御体勢で突進ツ！

「よいしょうツ！」

神父はそのメタボ体型に似つかわしくない俊敏な動きで起き上がる。

パシユツ！ パシユツ！ パシユツ！

地面を蹴つて後ろに大きく退きつつ、両袖から滑り出した**予備銃**^{バッカップ}

で迎撃する。9ミリ弾がエンペラーの皮膚を引き裂き、えぐる。が、突進のスピードは衰えることなく、そのままの勢いでヒット！

「ありやま」

神父の体が宙に弾き出され、綺麗に弧を描いて地面に叩きつけられる。そのまま「ロロ」「ロロ」と転がって、プールの角に脳天を「ゴリッ」とぶつけた……ゴリッと。

「こりゃーたまらん！　こりゃーたまらん！」

力ナリ痛いらしい。

「潰すッ」

不吉な言葉を呴きながら、エンペラーが追い討ちをかけようと迫る。その殺氣に反応して素早く立ち上がった神父は、飛び込み台の梯子に手をかけた。

ガチャ……

「ここまでだ」

「はうッ！？」

梯子に手をかけた途端、右手首に手錠がかけられた。親指を失つて憤怒の形相のエンプレスが立っていた。

「セツ！」

シスターが突っかける。3メートル近くあつた間合いを一呼吸で跳び越え、タワーの頬を直突きがかすめる。彼は辛うじてかわした体勢から左の回し蹴りを放つが、シスターの頭上を空振る。しかし、その足は着地せず、宙で方向転換して相手の右頬を打つた。

「あうちッ！」

シスターに被弾したが、彼女はヒットと同時に蹴りの方向に合わせて体を半回転させ、中腰で水面蹴り。

ドッ！

タワーの体が受け身をとれず、地面にうしづけられる。

「「」・どう・へるッ」

シスターの振り上げた鉄拳がタワーの顔面を狙う。が、命中する

よりも一瞬早く、タワーが下半身を浮き上がらせ、寝そべった状態で脇腹に一段蹴りを叩き込んだ。

「オフッ」

カウンター気味に入つて体が大きくよろめき、飛び起きたタワーが喉に掌底を打ち込んだ。

「うげッ……」

まともに食らえれば呼吸困難もありつるダメージだ。「個人が組織に勝てると思ったか？ 小さい者が大きい者に勝てる道理はねえよ！」

そう言ってタワーが指差す方向には……

「ここまでよ」

飛び込み台の先っぽに、後ろ手に手錠をかけられた神父が立たされている。その背後には、腸が煮えくり返ったエンプレスの姿が。

「咲チャーン！ こわ～い！ 高じト「わいへい！」

泣いてる。

「茜えええ～～、ちよつと聞いてくださいなううう～～！」

相方の危機、無視つた。

「それ以上暴れるなら、このガキを突き落とすッ！」

手錠付きですんで、もちろん溺れます。でも、彼女達に常識的な段取りはない。

「よし、質問だ！ あたしは弱いか！？」

「最つ強であります！」

「あたしは腰抜けか！？」

「百戦錬磨であります！」

「あたしは小さいか！？」

「Aエエエエカツプであります！」

「よ～～～し良く言つた！ 遂つてよし！」

「あアアアアリがとうござこまアアアす！」

「バカなッ！？」

跳んだ。エンプレスの手をすり抜け、手錠をかけられたまま。

「来週もまた観てくださいねエエエエエ！」

エンプレスが慌てて手を伸ばしたが、その手は空をつかむ。次の瞬間、派手な飛沫が上がって水面が大きく揺らぐ。ただ、その搖らぎとは関係なく、水面からニコッと突き出たのは……銃口。

「 ッ！」

パシユツ！

下をのぞきこんだエンプレスの左肩を銃弾が穿ち、飛び込み台から転げ落ちる。

(後ろ手で撃ちやがつた !?)

ありえない芸当を目の当たりにして、エンペラーが息を呑む。

「だからまた来週つて言つたのにねぇ……ふうがふうぐ！」

相方の仕事をしつかり確認したシスターが、何だかスッキリした面で構え直す。救助してやる気は毛ほども無いようだ。

「ナメんなよガキがッ！」

タワーはおもむろに上着を脱いで、敵めがけて投げつけた。

タンツ !

上着が宙を舞うのと同時に、タワーも跳んで蹴りの体勢。不意に視界を遮る物体が投げつけられれば、大きく回避するか、その場で叩き落とすか。が、シスターは勢い良く被さってきた上着を鷲掴みにし、グルンと体を一回転させ、相手めがけて投げ返した。

「うおッ！？」

想定外の応酬にタワーの体勢が大きく崩れ、何もできぬまま相手の目の前に着地してしまつ。

「ていッ！」

ドカツ !

顔面に足裏が直撃 ダウン。

「こちら ! 現在襲撃を受けている！」

この状況に危機感を募らせたエンペラーが、インカムでヘリのパイロットに呼びかけた。

「何事だ？」

「乗客と思われる女が二名！　一人は拳銃を持ち！　もう一人は…」

…と言つて、視線を移したその先では…

プリエステスが滑り込み気味にロー・キック。シスターはこれを垂直ジャンプで回避し、空中で下半身をねじって回し蹴りを放つ。これを予測していたプリエステスは、腰を落として避け、着地したシスターの胸ぐらをつかんで自分に引き寄せて密着し、目一杯の力をこめてヘッドロック！　プリエステスの腕がグイグイと喉に食い込み、動きを縛る。

「このまま海に放り出してあげるわ」

ヘッドロックをかけたまま回転。ジャイアント・スイングの要領で遠心力が加わり、ブンブンと空を切る音が大きくなる。

「出るッ！　出るッ！　中身が出ちゃう〜〜〜！」

「さあ、逝きなさい」

バツ　！

人間一人を吹っ飛ばすのに充分な遠心力が充填され、タイミングをはかりヘッドロックを解いた。が…

「懺悔はここまで」

「え？」

ズダンッ！！

ものすごく痛々しい音がして、プリエステスの後頭部と頸椎が地面に叩きつけられた。

（何てヤツだ……！）

イヤな汗が体中から吹き出るのを感じた。エンペラーは見たシスターの体が宙に投げ出される瞬間、プリエステスのネクタイが

つかまれ、遠心力と咲の体重から生じた引力により転倒。もちろん、受け身など取りようもない。

「さて、残るは一人」

エンペラーにシスターの不吉な視線が向けられる。

「へりを戻せ……」

「蒼神博士はどうした?」>

「いいから戻せッ！」

パイロットに怒鳴りつける。

「茜え～～、大丈夫か～～い？」

「ブ～～カ、ブ～～カ……」

ぱってりしたお腹を夜空に突き出し、ラッコみたいに浮いている。「体脂肪率に救われました」

まさに。

「はいはい、今すぐ引き上げますからね」

ズリズリズリ……

そう言つて持つてきたのはさつき使つた地引網。

「やめてッ！ マジやめてッ！ 咲ちゃん絶対痛くするから……」「バシャ……」

もう遅い。神父のアーフーした肉体に網が絡まつていく。暴れるともつと絡まつていぐ。巻かれていぐ。引き上げられる。

ドキドキドキッ……ドキドキドキッ……

網の中から皿にしたシスターの御顔は、とっても恋する5秒前。

「ふあ～とおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

ツツ～～」

両腕にビキビキと血管が浮き出し、人間一人を包み込んだ網が

「いやああああああああああああああああああああああああああ

ツ

ツツ！

丸投げ。跳ね上がる水飛沫。浮き上がる女体。空を切る音。即ち人体

二〇一〇年九月

二〇四

この怪現象に気付いたエンペラーが硬直する
ブオツツツ！放たれた。

「…………」

パシユツ！ パシユツ！ パシユツ！

網の中からという完全なる死角からの発砲。

一
「？」
吉川へお

肩先と二の腕から血が吹き出る。神父の方は仕事を終えて地面を派手に転がり、ヘリポートの鉄柵に後頭部をゴリツとぶつけて停止

「説小治政」

おまけに吐いた。

一
救濟終了

圧勝。自らに拍手を送りながら、シスターは脳元で十字を切った。

לְפָנֵי שְׁמַעֲנִים וְשְׁמַעֲנִים לְפָנֵי

「なんとか！？」

背後から不意に巻き上がる風。彼女の体を穿つかのように照射さ

れる、強烈なサーチライト。無音ヘリがその威容を現した。

「神父様ツ！」

「えいめ～～ん！」

パシユツ！ パシユツ！ パシユツ！

水浸しのプールサイドに体を滑らせながら、ヘリめがけて連射。しかし、銃弾はヘリの機能に障害をもたらすほどのダメージは与えられず、軽く火花を散らしだけ。

「装甲が厚くて、パラジヤ無理っぽ～～い！」

「おによれ！」

ヘリが緊急着陸する。

「タワー！ プリエステス！ 早く来いツ！」

「しかし……」

「我々が確保されたら、P F R S の法的接収を許すことになりかねん！」

「Hンプレスはどうするの？」

「時間が無い……急げツ！」

一瞬、エンペラーがプールの方に目をやった。仲間の姿は確認できぬ。彼は悔しさに歯を噛み鳴らしつつ、ヘリに逃げ込む。

ヒュンヒュンヒュン

「咲ちゃん、 Bieber？」

「別にいいじゃん。ギャラリーもないし

ヘリは敗残者を乗せ、闇の帳へ去つて行つた。

5時間後

「ん……つう……」

水平線から朝の領域を知らせる日がもれてきた。豪華客船の重厚な船体も、その恵みを欲してゆつくりと脈拍を上げていく。

「あふう……」

差し込む朝日が、ソファに横たわる青年を呼び起こそうとしている。蒼神博士はムクツと上半身をもたげ、手の甲で両目をゴシゴシとこする。そして、朝日の差し込んできた方向へ反射的に視線を向けた。

(2日目か……よかつた、何もなくて)

彼は寝惚け眼のまま、辺りを見回した。

茜　自分が使うハズだった瀟洒なベッドで爆睡中。
咲　リビングの隅っこで丸まって静かに就寝中。

「…………どうしたものか」

彼は幸せに満ち足りた茜から躊躇なく毛布をひっぺがし、咲の背中に優しくかけてあげた。博士は何だか照れ臭くて苦笑した。彼は洗面所のドアを開けて、バスタオルを用意する。汗ばんだTシャツと下着を脱いで、洗濯機に放り込む。そして、シャワー室のドアをガチャ。

「…………」

バタンッ

ドアを閉める。博士が全裸のまま呆然として突つ立っている。

「えへーと……えへーと……（汗）」「
もう一度、ガチャ。

「…………」

バタンッ

再度閉める。

「…………んん？　ちょっと待てよ……（汗）」「
で、更にもう一度ガチャ。

「…………」

「いや 誘拐ですね
「そうですね」
「.....」

誘
拐
?

秘密協定と裸Hプロン（ ）

「ドコのダレですか！？ これは立派な犯罪ですよーーー」

「ひどいッ！ あたし達がやつたとーーー？」

「見知らぬ女性が部屋に侵入して、自分を縛つてバスタブに入った
……とでも？」

博士は被害女性をビシッと指差して問う。とにかく、まず助けて
やれよ。

「んーッ！ んーッ！」

声を出せない被害女性Aさんが、バスタブの中でバタバタしあじ
めた。

「むッ、こりゃイカン！ 寒くて震えとるーーー」

夏場です。

「じゃあ、バスタブを熱湯で満たさなきゃーーー。
死んじやいます。

「もういいです」

博士は一人をバスルームからつまみ出す。

「大丈夫ですか？」

バスタブの中の女性がやっと救助される。猿轡を取つてやると開
口一番に……

「どういうつもりですか、蒼神博士？」

「……はい？」

いきなり自分の名を呼ばれ、パンツ一枚男は固まつた。

「私一人を人質にとつたぐらいで、PFRSが取引に応じるとでも
思いましたか？」

「…………ツー？」

迂闊だつた。『PFRS』の名が出た以上、この女は密船のクル
ーでも客でもない。

「君は……ダレだ？」

「『スノードロップ』のエージェント・ヒンプレスです」

女はキツと博士を睨みつけて名乗った。

(バカな……この船を占拠したのか！？)

いや、そんなハズはない。追及の矢面に立たされているPFRS

が、大勢の民間人を前にして秘密工作などありえない。

「『フリージア』の襲撃が失敗した後も、本部はアナタの動向を衛星で監視していました」

「それは……支配人の指示ですか？」

「ええ、そうです。本部が最も危惧したのは、博士が実情を正しく理解せず、間違った情報をマスコミに垂れ流す事」

「ボクは……上級職員として神の設計図^{バイタルズ}のプロジェクトに携わっていました。何が正しくて、何が間違っているかは把握しています」

「博士が何を把握しているかは、私達にとつて問題ではありません。支配人がなさる事に間違いなどないですから」

「なら、どうして彼はフリージアをよこしたんですか？」 明らかに口封じじゃないですか？」

「……本来の目的は『殺害』ではありませんでした」

「え……？」

「監視衛星の映像は軍部に中継されており、軍部からの命令は『拉致』でした」

「なら、フリージアの件は……支配人の独断？」

「ええ、そうです」

エンプレスの表情が申し訳なさそうに曇った。何かおかしい……最大の出資者である軍部の指示を無視しても、PFRSには何の得もない。

「そういえば、アナタは一人でこの船に？」

「いいえ、私は……」

バンッ

!

会話を中断せようと、バスルームのドアが勢い良く開く。

「博士エエエエエエエー！ 朝シャンしたあああああ～～！」

御風呂セットを脇に抱えた咲と茜が元気に乱入し、有無を言わさぬ強引な空氣を噴出させている。

「え、あの……まずはこの女性を……」

「脱ぐよ！ 叫ぶよ！ 訴えて勝つよ！」

「はい、出ます」

パンツ一枚男は足早に退室。

「……………さて」

咲の口から冷ややかな声が。そして、蛇口が目一杯にひねられた。

「うぶッ！？」

大量の冷水がエンプレスの顔面を打つ。

「ど～～～よオ？」

とても楽しそうな咲の笑顔。その脇では茜が小躍りしながら脱衣中。

「拷問のつもり？」

「……拷問？」

「こんなことで私から情報を引き出せると思つなッ」

「…………情報？」

「とぼけるなッ！」

冷水を浴びながら抗議の声を上げる。

「咲チヤーン、この才姉サンつて、わたし達の社会的立場を勘違いしてゐみたい」

「むッ、そりゃイカン。では自己紹介だ。あたし等は調査会社の社員。つまり、民間企業のサラリーマンだ。24時間働けますかつて？」

「無理だバカヤロー！」

「…………調査会社？ 蒼神博士に雇われたシークレット・サービスか？」

「違うッ！ あたし等は傭兵でもスペイでも何ぢゃうエンジニアで

もねえ！ 納税に苦しむ国民様だッ！」

「違うッ！ あたし等は傭兵でもスペイでも何ぢゃうエンジニアで

もねえ！ 納税に苦しむ国民様だッ！」

ドボドボドボ……（水位上昇中）

「身分証は？」

「見やがれツ！」

そう言って社員証をズイツと突き出した。

「……『イレギュラー』？」

泥棒を見るような目で、社員証と咲の顔を交互に観察する。
「これにより、民間企業の栄えるある社員であることは証明された！
あたしこそが汐華咲、18歳！ 座右の銘は“アンチ・萌え”！
「で、わたしが相方の柏木茜、19歳！ 健康診断でひつかかる度
に、枕を涙で濡らすメタボリック！ いやツほオオオオオオオオ
オオ」

朝からブチギレてる少女はブラ（Fカップ）を振り回す。

「アナタ達……本当に民間人？」

「おつよ、ミンミンでカンカンよ」

ドボドボドボ……（水位上昇中）

「で、数時間前に殴り合いしといて今更なんだけど、自己紹介よろしく」

「フザけるなツ！ 人を誘拐しておきながらツ！」

「おいおいおい、人様のクライアントを拉致ろうとしたプロの不審者か、この状況で上から目線かね？ ビー思うよ？」

シャアアアアアアアアアアアアアアアアアア

すぐ傍でシャワーを浴びる茜。ウエストのお肉がプルプルと愉快に震えている。

「今日からああアアアアア～～

炭水化物ダイエツトオオオオ～～

「

「やかましい」

パコンツ

近くにあつた桶を投げる。当たる。アホが倒れる。

ドボドボドボ……（水位は胸元まで上昇）

「PFRSは軍部からの出資を受ける国営企業……つまり、私は政府の執行権を委ねられた役人よ。蒼神博士を強制送還するよう命令を受けた。これは法に則った正当な行為だッ！」

「はいはい、そーかい。ただねえ、御役人様には理解できない苦労が巷には溢れとりましてね。きつちり仕事こなさねえと依頼料がパア」

「現金ならPFRSが賠償してくれる」

「……って言つてるけど、どうするよ？」

シャアアアアアアアアアアアアアアアア

「悪の秘密組織みたいなトコから現金収入得たくなっつーい！ モーレツに反対ッ！ 児童ポルノ賛成ッ！」

社会的にマズイ発言を垂れ流しながら、全裸少女が拳を振り上げる。

「……ってなワケ。うちは信用と信頼で経営を維持しとるんで」

「蒼神博士はPFRSの機密情報を盗み出し、非人道的な実験をしているなどとマスコミに公表した！ そんな彼に加担するのか！？」

「ん～～ 親指は痛むかね？」

咲は話を逸らし、ビニール袋を取り出した。中には……人間の手の指。

「……ソレがどうした？」

「いやあスゴイよねえ……根元からフツ飛ばされたのに、大した処

置もせず出血が止まつてゐるし。他の連中も胸に撃ち込まれたのに致
命傷にもならん」

「だから？」

「“非人道的な実験”とやらは、ホントに無かつたのかねえ」

「……」

ドボドボドボ……（水位は首まで上昇中）

パンツ　　！

オープン・ザ・ドア。

「博士ニニニニニニニニ！」

ドアの前に姿は無し。リビングにも無し。寝室も同様。キッチン
に……居た。

「冷蔵庫の野菜室をパンツ一枚でゴンゴソしているそこの人ッ！」

「な、何でしよう……？」

「『^{アースト・ヒューマン}強化人間』とは何ぞや？」

「え？　あ……は、はい。^{アースト・ヒューマン}強化人間」とは、人工的に作成した酵
素で遺伝子疾患の遺伝子配列を修復してあり、病氣にかららず外部
からの物理的ダメージも、驚異的なスピードで回復する機能を有し
た者です」

「なるほど、よく分からん」

不敵に微笑みながら言うセリフではない。

「それはそうと……あの女性はP.F.R.S本部に常駐するSPですよ。
どうしてバスタブの中に？」

「おおっと！　イカニイカニッ！　水を出しつ放しだ！」

バタンッ　　！

そう言つてまたもやバスルームへ。

「ヘイっ、ゴー！！」

シャンプーハットを装着した茜が妙なポーズで指差していく。
「どけいッ」

なんとなく邪魔だつたんで、シャンプーハットを奪つて捨てる。

「目がツ！ 目がああああああああああツツツ！」

期待通りシャンプーが目に入つて、悶絶。

「ちょっとわあ……取引といかない？」

威圧的な瞳でバスタブの中の被害者を見下ろす。

ドボドボドボ……（水位は口元まで上昇）

「……取引だと？」

「ザバンツ！」

エンドレスの髪が驚拘みにされ、顔面が冷水めがけて荒々しく突つ込まれた。いちにさんしんじ。

「……ぶはツ！ げふツ、げふツ…」

不意に呼吸をやめさせられ、彼女の顔はクシャクシャだ。

「まずは話を聞けや、役人様」

「や……やかましい…」「んなマネをして」

「ザバンツ！」

「いぢにさんしんじるく

「……ぐへッ！ げふツ、げふツ…」

容赦無し。

「いいから聞け」

「う……」

髪を掴む手に尋常ならざる力がこもつている。咲の顔面が超至近距離まで近づき、エンドレスの視界を占める。

「あたし等はさあ、あくまで“調査会社の社員”でいたいワケよ。だから、アンタから博士に色々しゃべられると困るんだよねえ。昨晩のコトとかさあ」

「……そ、それで……？」

SPとしての忍耐が萎縮する。

「PFRS本部まで無事に博士を送り届けるのが仕事。もちろん、

アンタには同行してもうつから、その間は口裏を合わせて欲しいワケよ」

「やはりな……博士をダシに、P F R S 本部に侵入するのが目的か。一体、何者だ？ 何の用があるの？」

「用？ えへへへと……茜え、何か用事ある？』

「別にい、特になあああし！」

とりあえず、今はムダ毛の処理中みたいですのでモザイクをください。

「もちろん、同行はする……博士を連行するのが当初の任務だからな。だが、貴様等のような危険人物と取引などしない！」

「へえ、ならさあ……」

不意に咲がエンプレスの耳元に口を近づけ、ソッと囁いた。そのまま囁きでエンプレスの興奮が急に治まっていく。

「……いいだろ？』

「よろしい、よろしい』

取引が成立した。

10分後

バタンッ

「博士ツ、風呂空いた～～って、うおツー！」

「はい？」

料理をする音が聞こえる。キッチンには蒼神博士が立っている。もちろん、トランクス一枚。その上からエプロン着用してるとんだから、正面から見るぶんには裸エプロン。

「うほツ』

咲がいけない声を出す。

バタンッ！

バスルームへ再度突入。

「茜、大変ツ！ 23歳の美青年がキッチンで裸エプロンに…』

「まあ、なんて卑猥なツ！ 早速録画ねツ！」

バタバタバタツ

二匹のケダモノは縛られたままのエンプレスを残し、バスルームを飛び出していく。

(くそッ……)

たかだか十数分で終わる任務のハズだった。

(……どうする?)

任務の性質上、P F R Sからの救援は期待できない。となれば、本部への潜入作戦に同行して、自力で帰還するしかない。先程の取引内容が頭の中をよぎる。彼女はスーツの所々からジヨロジヨロと水を垂らし、立ち上がった。

SPの事情とパンダ＆ライオン

2日目、夕方。

「ふう……」

たちこめるミストの中に溜め息が流れる。六角形の少々狭い空間には離壇があり、その1段目にバスタオルを下半身に巻いた蒼神博士がいた。他の客は見当たらない。ミストサウナの外にある人工温泉にも人影は無い。

(……)

今までの喧騒がウソだったかのように、心が落ち着いていく。和やかな気持ちになつて考えがまとまつてくると、つい先日のニュー^{オーナー}ス映像が脳裏に甦る。P F R S支配人と傍らに傅く白衣の女性。

「……ッ」

女性の顔が脳細胞の中を泳ぐ。それに合わせてジワジワと汗が噴き出してくる。

力チャヤツ

!?

男性客が一人入ってきた。反射的にビクッと体をよじらせた博士を少々訝しがりながら、離壇の最上段に腰を下ろす。

(落ち着け……とにかく落ち着け)

人が入つてくるのは当たり前だ。しかし、自分はこれほど無防備でいいのだろうか？ そう思うと、背中にありもしない気配を感じたりする。斜め後ろに座った小太りのハゲオヤジが実は……ということもありうる。大金を抱えた人間が、周囲の者達全てを強盗と見てしまうように、自分の視界で動く物全てが危険物に見えてしまう。

「すう～～はあ～～」

肺一杯にミストを吸い込む。世界は平和だ。人類は笑顔だ。神様は正しい者に微笑む。

力チャヤツ

！？

「…………」

ドアを開けた本人と博士の目が合つた。相手は一言も発さず中に入つて来ると、周囲の様子をしつかりと確認した後、博士の隣に座つた。

「え、え～～と……あの……」

「何か？」

「…………いえ、なんでも……」

「そうですか」

男湯のミストサウナにスース姿の若い女性が入つて來た。

「改めて自己紹介しておきます。私はエンプレス。スノー・ドロップのメンバーです」

「は、はあ……」

「成り行き上、こうなつてしまつたからには仕方ありません。博士に同行します」

「えつ……本部にですか？」

「本部のS.Pに見張られていては、潜入作戦など成功するハズもない。

「私はチームを抜け、単独で博士の説得にあたるよう、特別に指示を受けました（咲にと言えと言われた）」

「じゃあ、この客船にアナタの仲間は……」

「もちろん、いません」

「…………そうですか」

「バスタブに転がつていたのは、特に意味はありません（咲にと言えと言われた）」

「は？」

「特に意味は無いのです！」

顔を少し赤らめて、ワケの分からぬ力説をされても困る。

「ところで……蒼神博士はP.F.R.Sの事をどれだけ御存知ですか？」

「……？」

彼女は何か言いたげだった。

「ボクがPFRS本部に配属されたのは、『神の設計図プロジェクト』のオブザーバーとしてスカウトされたからです。途中参加だったので、配属される以前の歴史的なことは殆ど関知していません」
「それなのに博士はPFRSを糾弾されたのですか？」

「……たとえ今回の件が、PFRSにおける初めての汚点だつたとしても、黙認はできませんでした。最初の間違いを容認してしまうば、次からは躊躇も検討もされなくなり、その数が増える度に人間の良識は削られていきます」

「私は博士が嘘をついているとは思いません。が、オナ支配人の意志に基づいて実行された計画が、世間一般で言われる違法行為と判断されるのは、納得できかねます」

「エンプレスさんは……PFRSと何か特別な関わりがあつて配属されたんですか？」

「いえ、私はただの患者でした」

「患者？」

彼女は博士の方に顔を向けると、前髪をかき上げて額のバンダナを外した。

「あ……」

博士の口から驚きの声が小さく漏れた。髪の生え際近くに刻まれた、痛々しい傷痕。一見してただの外傷ではないと、素人目でも分かるモノだ。

「かつて、私は軍のレンジャー部隊に所属していました。2年程昔のことです……訓練中に気絶して緊急入院し、検査で脳に悪性の腫瘍が発見されました」

「…………」

「民間の医療施設を転々として、何度か外科手術に臨みました……が、運の悪い事に、処置の困難な位置に腫瘍ができていたため、全て失敗しました。着々と腫瘍は大きくなつていき、余命1年と診断

されて私は人間社会から見捨てられました

「…………」

「そんな時、軍部の上官からPFRSを紹介されました。軍から多大な出資がされているため、優先的に診てもらえることになったのです」

そう話す彼女の表情に、緩やかな笑みが含まれている。

「PFRS本部に入院した私は、^{オーナー}支配人と出会い選択を迫られました」

「選択？」

「余命1年という天寿を人間として全うするか、それとも……“人ではなくなり”生き長らえるか」

彼女のその言葉に博士は表情を曇らせた。

「私は当初、その提案を拒絶しました。^{オーナー}支配人に強化人間となる手術過程と、その後の自分の立場について、十分説明を聞いた上での判断です。私はPFRSの療養施設で最期の時を迎えようと、覚悟を決めました」

「…………」

「入院して初めて知りました。当時のPFRSには、私のように不治の病で死の近い身体を預けた者達が、世界中から集められていました。彼等もまた、^{オーナー}支配人から人生の選択を迫られ、拒絶を選んだ人達でした」

「…………」

エンプレスの目が次第に泳ぎ出した。

「いつ死んでもおかしくない者達が大部屋に敷き詰められ、これといつた生命維持処置も受けられず、毎日のようにダレかが死に、袋に入れられて去って行きました。陸揚げされた魚みたいに体をバタつかせる者……ものすごい勢いで吐血し、自分の血溜まりに顔をうずめ動かなくなる者……日の出と共に首を吊る者……病棟に放火しようとして逮捕される者……終わらぬ妄想に追われて脱走し、海上で浮いているのを発見される者……」

「…………」

「私はレンジャー部隊に配属されていた時分、生き方に絶対の誇りを持つっていました。将来に展望もあり、不安も恐れも無かつた」

「…………」

「訓練中に点検ミスで実弾が発射され、鎖骨を碎いたことがありました。ボートが転覆して溺れたこともあります。けれど、それを『恐怖』とは感じていなかつた。しかし、あの大部屋には……恐怖しかなかつた」

「…………」

「荒唐無稽でイララする空間から、淡々と人間が消えていく……ダレも寝ていないベッドが次々と増え、声が消え、生きているとう感覚が薄れて私は……怖くなりました」

「エンプレスさん……」

彼女の指先が小刻みに震えている。蒼神博士はかけてやる言葉が思いつかなかつた。

「緩慢に訪れる死の時間に揺られ、呼吸するだけの生活でした。そんな中で私は考えを改めました」

人ではなくなるつ

「思い知らされました。人間は恐怖に打ち勝てるようにはできていません……私は支配人に陳情し、手術を受けて人をやめました」

「…………う」

エンプレスの瞳をしっかりと見据えながら、博士は涙を流した。

「蒼神博士？」

「うつ……うつ……うぐ……」

静聴していた蒼神博士が顔を隠すように片手を押し立て、嗚咽を漏らしている。

「もし、支配人が“悪”と判断された時、ボクに協力してくれますか？」

博士はエンプレスの手をヒシッと握り締め、潤んだ目で見据えた。

「…………」

即答は避けられ、エンプレスは申し訳なさそうに視線を逸らした。

「そ、そうですか……」

一人でも多くの味方が欲しくて強く賛同を求めが、彼女は立ち上がり、ドアノブに手をかけた。その時、何かを思い出したかのように振り向く。

「“アノ連中”には気をつけください」

「え？」

エンプレスが独り言のように呟く。

「この客船の船長に事情を話して、端末から政府のデータバンクにアクセスしました。その結果、『イレギュラー』などといふ調査会社の存在は確認されませんでした」

彼女の言葉に博士の顔色が変わる。

「ちょ……ちょっと待ってください、ボクは確かにネットで『イレギュラー』のサイトを見つけ、コントクトをとつたし……」

「確かにサイトは存在するようです。しかし、不動産リストからサイトに記されている住所を調べ、地元の警察に連絡して捜索してもらいましたが、アパートの一室に交換機が一台置いてあるだけでした」

「そんな……！」

不意に力が抜けて俯く博士を他所に、エンプレスはサウナを後にした。

(どうする？ どうする？ どう……)

できれば耳に入れて欲しくない情報だった。引ぐに引けないこの状況で、取るべき選択肢の重要性が更に増した。

「わあああああああああああああ

ツツツ！」

無理矢理ふりきるような大声を出しながら、彼は飛び出していく。

そして。

パタツ

後ろの中年デブオヤジが、のぼせて倒れた。

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

3日目、正午。客船は予定の港に停泊していた。物資の補給と船のメンテナンスが迅速に行われ、客の殆どは久しぶりの陸地を踏みしめるため、船を降りている。その中に……周囲に対して“見ちゃいけません！”的な空気を振り撒いている一団が。

「…………」

俯き加減に押し黙る蒼神博士とエージェント・エンプレスが、歩幅を大きくとつて先頭を進む。というか、逃げる。一人の後ろを『パンダ』と『ライオン』がついて来るから。

パンダ？

ライオン？

正確に言つと、パンダとライオンの着ぐるみがスキップしたり手を振つたり……街角で風船やチラシを配つたりしているアレ。メチャメチャ目立つて、通行人は皆振り返つている。パンダにいたつては、デート中のカップルめがけて空き缶を投げつけたりする始末。

「博士……我々はどう対応すれば？」

「慣れてください」

それはそれで問題だ。

「さて」

しばらくして、蒼神博士は巨大なシャッターのある倉庫の前で足を止めた。

「博士、ここが……？」

「はい、海底トンネルへと続く入り口があります」

「しかし、本部は船を衛星で追跡しています。我々がここで降りたことに気付いているのでは？」

「一度にたくさんの乗客が降りましたから、微妙な角度調整に時間がかかるって、おそらく5分～10分ほどのカバーしきれていない空白ができたハズです」

そう言って彼は鍵を一本取り出し、シャッターの脇のコンソールに差し込んだ。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

！」

重々しい金属音をたてながら、シャッターが上がりていき……

「へ？」

博士の目が点になる。人がいたのだ。一人や二人ではなく、大勢の人間が……しかも武装していて、一斉にこっちを向いて言った。

「何だオマエ達！？」

まさにこっちが言いたいセリフなのだが、銃口があつちこっちで黒光りしていて、四人めがけて狙いをつけていた。

想定外の事態ともつと想定外の事態

「蒼神博士…… 一体、コレは？」

エンプレスは拳銃のホルスターに手をかけたまま固まる。

(そ、そんな……！)

いきなり障害が立ち塞がつた。

「大変だよ、ライオン君！ きっと、あたし等を狙つた密猟だよ！」

「そりやヒドイね、パンダ君！ 国際条約違反だね！」

バカ二体が抱き合つ。

「……蒼神槐さんですか？」

防弾ジャケットに身を包んだ集団の中から、スーツ姿の中年男性が博士の名を呼んだ。

「え、あ……アナタは？」

『国家調査室』の者です

スーツの男は身分証を取り出して見せ、同時に手で仲間に合図する。

「とりあえず、作戦の邪魔になつては困りますので」

博士とエンプレスの腕を武装隊員がつかむ。

「杜若室長、『コレ』はどうしますか？」

呼ばれた方に手をやれば、ものすごく愛想の良いパンダとライオングがいる。

「蒼神博士…… アレは？」

「知りません」

どうとうクライアントがやさぐれだした。

「はい、スミマセン。確かにやりました。群がるガキ共があまりにウザかつたんで…… いえ、金属バットは自分のじゃありません」

「オハヨウからオヤスマニまで暮らしを見つめてたら、ストーカーで捕まりました」

聞かれてもないのにパンダとライオンが余罪を述べる始末だ。

「国家調査室……それじゃあ、この部隊は……！？」

エンプレスが事態の急展開に動搖する。

「我々はこれより、P F R S に対して強制捜査を行います。海底トンネルの設営に携わった業者から匿名の通報がありまして……このまま皆さんを解放するワケにもいきませんので、御同行をしました……。

「当然のことながら、これは非公式の作戦です。成功しようが失敗しようが、公式には発表されません。よつて、最悪のケースもありますが……宜しいですね？」

一方的に拘束しておいて、宜しいもクソもない。

「ええっと……信じてもらえないかもされませんが、着ぐるみの一人は調査会社から派遣された社員で……しかも、未成年なんです。せめてここで保護してもらえませんか？」

「申し訳ありませんが、素性の確認がとれない現状で解放するワケにはいきません」

政府の役所仕事に融通はきかない。

ガコオオオオオオオオオオ !

大量に積まれたコンテナの一つがクレーンで持ち上げられ、そこに地下へとつながる階段が現れた。

「室長、準備できました！」

役人共はどうしようもなくヤル気十分で、部隊長がメンバーに檄をとばしている。

「わあい、國家権力の横暴が始まるよー ハワイよハワイよ、ライオン君！」

「よおし、兵隊さん達の邪魔しないよう、後ろの方で怯えてようね、パンダ君！」

一体の不燃物がヒシツと抱き合って震えてる。

「室長、この女……拳銃を持していました」

エンプレスのボディチェックをしていた隊員が、自動拳銃を取り上げた。

「なるほど、目的はともかく手段は同様といつゝことですか、博士？」

「彼女はPFRS本部に所属するSPです」

「ほう……どういう了見でここに?」

「蒼神博士の持つPFRSへの疑念に一部同意した。それだけよ

「信じがたいな」

そう言つて室長は隊員達に田配せする。銃器をチェックする金属音が、コンテナの森に反響する。

「では、博士とゲスト三名は私と来てください」

一同にただならぬ緊張がはしる。早くも計画に狂いの生じた蒼神博士は、オロオロするしかない。

メンテナンス用海底トンネル『ソラリアム』　　トンネル延長約60km。幅22m。高さ13m。約90万tのセメントと20万tの鋼材を使用し、最先端の掘削技術を駆使して15年かけて本土とPFRSをつないだ。トンネル内部には左右に設けられた歩道と、中央に敷かれたケーブルカー用のレールがはしつている。

カツーン、カツーン、カツーン……

地上とは打つて変わつてヒンヤリとした空気が漂い、階段を下りる足音が澄んだ空気に良く響く。地下150m地点、本土側の駅となるポイントに到着。そこには重厚なケーブルカーが不気味に佇んでいた。

「部隊長、監視カメラは?」

「問題ありません。PFRS側の内通者が偽の映像と音声を流しています」

蒼神博士と国家調査室長はケーブルカーに乗り込むと、並んでイスに腰を落とした。部隊員達は割り当てられた配置にバラける。

「どうしょ。酔い止めの薬忘れちゃったよ、ライオン君!」

「平気だよ。ゲロつても画的にはバレないさ、パンダ君!」

いつまでたつても緊張感を持つてくれない変質コンビは、最後尾に仲良く着席。

ガゴオオオオオオオオオオ……

ほとんど置物と化していたケーブルカーにエネルギーが吹き込まれ、乾いた金属音が木靈する。子供の運転する自転車程度のスピードで走り出した。

「……あの～～、やたら安全運転ですね」

蒼神博士が不安げに咳く。

「PFRSに十分な“準備時間”を『えてやるのです

「……は？」

「ネット上に複数のテロリストが本日PFRS本部を強襲するとう、偽情報を流してあります」

「そ、そんな事をしたら、警備がより厳重になつて潜入が難しく……」

「PFRSは我々と同じく政府直轄の機関ですが、私の知る限り、SP以外が銃器を所有し使用するのは禁止されています。が、一部の上級職員が警備の特殊性をでつち上げて、軍仕様の銃器を常用していると聞いています」

室長が向かい側に座るエンプレスを睨みつける。

(……)

彼女としてはあまり目を合わせたくない。

「つまり、銃器類の摘発を口実に、バイオハザードの件にも着手するといふことですか？」

「そうです。少々リスクはありますが

「しかし、それほど済し崩し的に上手くいくでしょうか？」

「今まで強制捜査に乗り出せなかつたのは、PFRS本部の特殊な立地にありました。本土からのハッキングを受けつけず、直接占拠しようにも時間がかかりすぎて、重要な情報を隠蔽されてしまう。

だが、今回は蒼神博士の離反により、内部がガタついている

「なるほど……」

図らざして自分の行動が別の組織を動かしていた。個人といつても組織に対して無力というワケではない。

グオオオオオオン……グオオオオオオン……グオオオオオオン……

ケーブルカーは重武装した隊員達に挟まれた形で、ひたすら真っ直ぐ進んで行く。団体のデカイ鈍足に乗つて、変化のない風景を窓から見ながらの行進は、なんとも退屈。故に脳内には 波が大量発生。

「ングオオオオオオオ！ フグオオオオオオオ！」

後ろの方からわざとらしいくらいのイビキが聞こえ出す。腕組みしてふんぞり返るパンダに、ガックリと首が折れ曲がったライオン。「蒼神博士、自分の立場上、関係者の素性を把握しておかなければならぬのですが」

「話さないといけませんか……」

「はい」

役人の仕事意識は強かつた。

「実は……」

博士はネット上で契約した調査会社と、そこから派遣されてきたという二人のこと。そして、エンプレスが話してくれた二人に関する疑惑について、かいづまんと説明した。

「……『柏木茜』？」

杜若室長は目を細めて後ろにチラッと視線をやると、PDAを取り出した。

「どうかしましたか？」

「…………」

彼はPDAを凝視しながら眉をひそめる。

「『汐華咲』という名前に聞き覚えはありませんが、『柏木茜』と

「いつのはドコかで……」

何やら意味深な室長の言葉に、博士は一瞬悪寒を感じた。エンプレスの話した内容にイヤな信憑性が出はじめた。

「いざれにせよ、後ろの一人が故意に博士へ接触してきたのは間違いないでしょ?」

「……そ、そうですか……」

情報機関の役人に面と向かって断言されると、やたら重く響く。こうなると、予定外のプロの武装集団は心強い。これでとりあえずは身の安全が保障され

ドサツ

た!?

「なにッ!?

人間の体が地面に転がる音がした。ケーブルカーの乗員達が目にしたのは、運転手の……死骸。

「伏せてくださいッ!」

室長は咄嗟に博士に組み付いて床へ伏せさせ、左右の歩道を並走している隊員達を見回してみる。しかし、ダレ一人として襲撃に気付いてはいない。

「ミス・エンプレス……何か聞こえたか?」

「……いや、何も」

一緒に床へ伏せたエンプレスの顔色が変わる。ゴロリと転がる運転手の生首と目が合つてしまつ。

〈室長、何事ですか?〉

車内の状況に気づいた部隊長の声が通信機から聞こえてきた。

「周囲を警戒しろッ、運転手が襲撃を受けて死んだ!」

〈襲撃ツ!?

ドサツ

!

隊員の一人が突然、上半身をグンッと仰け反つてレール脇に落とした。

「早く停止しないとッ！」

「駄目ですッ！ 敵の位置が把握できないまま止まるのは危険だッ！」

ガコソッ！

室長は運転席まで這いずり、コンソールに手を伸ばして速度調整レバーを乱暴に押し出した。

グオオオオオオオオオオオン！！

急激なスピード上昇でケーブルカーが悲鳴を上げ、せっかくまでのんびりムードを払拭するかのように走り出す。

〈室長！？〉

「強行突破するッ！」

見えない敵の目的はおそらく蒼神博士だらうが、国家調査室としても計画は狂い出した。

「…………何ッ！？」

スピードが最高速度まで達したところで、室長と蒼神博士の視界に出現した『人影』。それはレールの上に佇む一人の女性。このまでは確実に轢き殺してしまう。緊急停止ボタンに手を伸ばすが、その手を蒼神博士が払いのけた。

「止めちゃダメですッ！」

「殺す気ですかッ！？」

「止まればこっちが殺されますッ！」

グシャ

――！

避ける素振りも見せない女を、ケーブルカーの巨体が無情に轢き

潰す。その後

ガギギギイイイイイイイ
ツツツンーー

「 ッ！？」

何ががものすごい音をたてて裂けた。ケーブルカーが…………前後に割れた。

「 蒼神博士ッ！！」

エンプレスが咄嗟に手を伸ばし、彼を自分の方へ強引に引き寄せた。ケーブルカーは綺麗に両断され、前部と後部とが少しづつ離れていき、室長も慌てて後部に飛び込んだ。

「 博士ッ、ケガは！？」

「 なんとか……無事です」

「 クソッ、どういうことだ！？」

「 ンガアアアアアアアアアア！ ンゴオオオオオオオオ！」

実にマズイ。正体不明の攻撃を受けているのに、頼みの武装集団が追いついてくるには、少々時間がかかるてしまう（パンダとライオンのイビキも最高潮）。

〈室長ッ、大丈夫ですか！？〉

通信機から部隊長の喚き声が聞こえてきた。

「 ケーブルカーが大破した！ 原因は不明！ 敵の姿も確認できな
い！」

応答する室長の傍で、蒼神博士は綺麗にカットされた窓から恐る恐る外をのぞく。

「 あ、蒼神博士だッ、生きてたのだッ」

『敵』が いた。

「 うわッ！？」

窓ガラスにへばりついた一人の女がニコッと微笑みかけてきた。

「フ、フリージア…………やつぱり君か…………
博士の頬が引きつった。

突撃する蛮勇と迎撃する賢者

ガシャアアアアアアアアアア
ツン！
ツツ

室長は備え付けの消火器を持ち上げて、その女めがけて投げつけた。

「バケモンがツ！」

ガラス片を派手にブチ撒いて、女はレールの上を転がった。

「蒼神博士ツ、アレは一体！？」

「まさに『敵』です」

「P F R S の人間ですか！？」

「神の設計図^{バイタルズ}から抽出したタンパク質の適合実験に成功した、^{ブースト}^{強化}ヒューマン人間の一種です」

グオオオオン……グオオオオン……オオオン……

ケーブルカーの残骸も、そろそろ惰性で走る限界をむかえてスピードが落ち……止まつた。そして、前方に続くレールの上には、残骸の前半分と白衣姿の淑女。

「そんな……！」

蒼神博士が神妙な面持ちで指差した先には、赤縁メガネをかけた白衣姿の長身の女性が仁王立ちしている。テレビの記者会見でP F R S の支配人の隣に座り、記者から質問を受けていた職員だ。

「槐ツ！」

「は、ハイツ！」

いきなり下の名前で呼ばれて反射的に博士が硬直してしまつ。

「H-ジエント・エンプレスは？」

「ここにいます……」

親に叱られる直前の子供みたいな表情で、彼女はその姿をせりじた。

「エンプレス、オーナー支配人は大変困惑されています。本部に戻り次第、言い訳を聞かせてもらいます」

「今、この場にて言い訳をしても宜しいでしょうか？」

「許可できません」

エンプレスの意気込みは、その場で一蹴されてしまった。

「アンスリューム博士……ど、どうしてここに？」

蒼神博士が白衣の女の名を口にする。

「アナタの単純な思考パターンを読んだのよ」

「ボクは……どうしてもP F R S本部に行かなきゃならない」

彼は勇気をふりしぶり、ケーブルカーの残骸から降り立つ。そして、レールの上で対峙した。

「もちろん、連行はするわ」

「……」

「支配人は軍部からの命令に背いてまでアナタを殺害しようとした。つまり、アナタが秘密裏に接収した実験データの一部が、どれだけ重要か考慮した上での判断よ」

「……ごめんなさい、アンスリューム博士。やはり、ボクはP F R Sの不正を見逃せない」

「それだけ？」

「え……それは……」

蒼神博士が何かを指摘されたみたいに怯んだ。

「『棕櫚』に会いたいのね？」

「うッ……」

「エンプレス、槐を連れて先に行きなさい。中継地点に輸送ヘリを待機させてあります」

「……は、はい……」

『アンスリューム』と呼ばれた女性に気圧されて、エンプレスが蒼神博士に目で合図した。その時……

「室長ッ！」

大声とたくさんの足音を響かせて、部隊がやつと迫りついてきた。
「さて、アンスリューム女史……ここまでだッ！」

冷静に状況を観察していた室長が、味方の到着を機に攻勢に出る。
「フリー・ジア！！」

アンスリューム博士の怒号がどび、レール脇に転がっていた白髪で浅黒い肌の女が起用に起き上がる。

ザツ !

この展開に殺氣を感じ取つた隊員達が、素早く戦闘態勢をとる。相手はダークホワイトの密着式ボディースーツを纏つた、モデル体型の女が一人。スーツから浮き出たバストとヒップのラインが妙に艶めかしい。

「ねえねえ、どうするう？」

「スーツの男は無視しなさい。他の連中は殺してよし」
アンスリューム博士から冷徹なる命令が下された。

「はあーい」

元気な返事とともに両手に構えたブレードをギラつかせる。

「…………」

一瞬、その場の全員が沈黙した。殺陣の空氣を感じ取つて

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ

ツツ

ダレが最初に発砲したかなど、どうでもいいくらいの銃弾が撃ち込まれる。銃弾は相手のボディースーツを裂き、皮膚を削り、体勢を崩す。激しく飛び散る火花と耳障りな轟音が、目の前の敵を討ち滅ぼそうとする。

「痛いのだツ、ひどくい！」

敵は残骸となつたケーブルカーの前半分に素早く逃げ込み、その身を隠す。

「部隊長、そちらから中を確認できるか?」

「室長が無線で話しかける。」

「……いえ、ここからでは死角になつて目視できません。焼夷手榴弾でも投げ込みますか?」

「いや、P.F.R.Sとの交渉材料として使いたい。生け捕りにする」

「了解しました」

部隊長が部下一名に手で合図する。

「だ、大丈夫でしょうか……?」

刑務所での惨劇から、フリージアの悪意の無い暴力は経験済みだ。

「まさか、こんな所にたつた二人で来られるとは」

室長が半分呆れた顔で女史アンスリュームの面前に立ち塞がる。

「協力的な職員が不足してまして。御不満かしら?」

「いやいや、構いません。それでは、アナタも我々と御同行を「却下」

ドサツ！

「なにッ！？」

ケーブルカーの前半分に乗り込んだ隊員一名が、竜巻の直撃を食らつたかのように中から放り出された。更に……

シャツ！

室長とアンスリューム博士の間を、一瞬にして透明の『壁』が隔てた。

「蒼神博士ッ、コレは！？」

予定外のアクターに動搖した室長が、関係者に答えを求める。

「このトンネルに設けられた超耐圧アクリル壁です。部分的な水没があつた場合、他のエリアと崩落箇所を隔離する機能です」

(……くそッ)

案の定、後方にも隔壁が下りて、部隊は檻に閉じ込められた。

「部隊長ツ、ケーブルカーを狙え！！」

室長の叫び。敵の次の出方は絞られ

室七の口で商の波の出方一絶り木が刀の開闢に第一の刀

ストンツ

鉄棒の逆上がりをする要領で、ケーブルカーの内側から屋根に跳び乗ったフリー・ジア。その手にはいつに間にか鎖が巻きつけられていて、鎖の先は一本のブレードに繋がっている。

童女みたいな気合を入れる。部隊長の指示を待たずして、銃口を向ける隊員達。が、わずかな遅れが人の命を

ՀԱՅԱՍՏԱՆԻ ՀԱՆՐԱՊԵՏՈՒԹՅՈՒՆ

11

卷之三

大気が裂かれ、剣呑な光刃が隊員達の視界をかすめた瞬間、彼らの肉体は沈黙した。

「バカな……ツ！？」

左右の歩道から人間の体の一部が次々と転がり落ちてきて、室長の足元には部隊長の頭部が。

なんてことを！」

蒼神博士の全身が尋常でない虚脱感に苛まれ、その場にストンと

「降りて、いらっしゃい、フリージアー

卷之三

隔壁のロックを解除し、完全に攻撃手段を失った室長の前に、ア
ンスリュームが再度立ち塞がつた。

「エンプレス！」

「……は、はー。」

あまりに一方的な惨劇を田の辺たりにし、呆けていたエージェントが名を呼ばれて思わず硬直する。

「蒼神博士……行きましょう」

中途半端な抵抗力は無いに等しい。

「いえ、ボクはまだ彼女に聞きたい事が……」

それは彼女も同様だつた。

この状況では建設的な展開は望めません。まずはへりに……まあ」

博士の腕をつかむエンプレスの手に、グッと力がこもる。

「…………分かりました。行きます」

エンプレスの悔しさと無力感は、腕をつかむ手から十分伝わつて
きた。

才才才才才才才才才才

隔壁がゆっくりと収納されていく。

「……んな！」

政府の情報機関が画策した超重要イベントがあれど幕を閉

悪の事態が違い過ぎていた。室長は体から力が抜け、レールの上にガクリと膝を落とす。

卷之三

アンスリューム博士は死屍累々とした周囲を見回し、満足気に微笑んだ。蒼神博士とエンプレスの姿が十分遠ざかつたのを確認し、彼女は戦意喪失した室長を尻目に、残骸の後ろ半分を見つめた。

「本題」に入りましょうか

「」の場にはまだ約一畳のギャラリーがいた。

「うわア、バカな大人達がバツタバツタと死んじやつたよ、ライオ
ン君ッ！」

「どうしよう！ オマワリさんに通報しないと……あッ、地下だからケータイつながらないよ、パンダ君ッ！」

わざとらしく怯えて抱き合つたりしている。アンスリューム博士は中指でメガネをクイッと押し上げる。

「客船での一部始終は衛星で觀っていました。だから、余計な尋問で長居するつもりはありません……アナタ達は何者？」

「ボクは世界の人気者・パンダ君！ 好物は笹と観光客」

「ボクは百獸の王・ライオン君！ 好物は草食獣！ 特にカルビ」予想通りまともな返事は返つてこなかつた。

「ふううう……」

アンスリューム博士は白衣のポケットから紙タバコを1本取り出し、火をつけた。

「軍部？ 電薬管理局？ それとも、他国的情報機関かしら？」

「彼女のメガネのレンズがギラギラしている。」

「ねえねえ、ライオン君……あの人つてイカれてる？」

「きっとそうだよ、パンダ君。こんなボク等を見て、スペイか何かと勘違いしてんだよ」

「ものすごい勢いでバカにされた。」

「……ちツ」

アンスリューム
女史はイラつとした表情で煙を吐き出し、踵を返す。それを合図に、彼女の脇をフリージアが笑顔で駆け抜けていき、両手に構えたブレードを目標めがけて……

「ドンツツツッ！」

轟音

「バキンツツツッ！」

衝撃

「 ッ！？」

アンスリューム博士の歩く方向へ、金属の破片がものすごい勢いで飛び散り、地面に刃先が刺さる。彼女からサッと血の気が引いた。（フリージアの単分子ブレードを……バカな！？）

「さつすが、ライオン君！ 密猟者には近代兵器で自衛してこそ野生だね！」

「もちろんだよ、パンダ君！ 何ひやうじ約を無視するバカ共は、コイツで肅清さ！」

百獣の王が重厚感タップリの長身銃を腰だめで構えている。で、パンダは横で缶食つてる。

「対物ライフル！？」

咥えていたタバコが彼女の口から滑り落ちた。

突撃する蛮勇と迎撃する賢者（後書き）

単分子ブレード＝金属炭素のレーザー・キャビテーション加工により、エッジを分子一つ分にまで研磨した刃。要するに、ダイアモンド並の硬度を有し、加える力によつては切断できない物質は無い。腰だめ＝銃床を腰に当て、大まかな狙いで発砲すること。

対物ライフル＝主に狙撃と陣地、軽車両への攻撃に使用。機関砲弾に分類されるような大口径弾を使用。貫通力が非常に高く、土嚢や壁などの障害物に隠れる敵も殺傷できる。種類によつては、2km先の人を撃つて上半身と下半身どが両断して吹き飛ぶ事例も。

仁義無き女の闘いとギャラリーのオッサン

「さてさて、蒼神博士を追わんとね。送迎ヘリに乗り遅れちまつ」

「そーだねそーだね、ハイジャックだね」

「ここでも状況が一変した。あまりに想定外だ。

「アンスリューム博士えええ～、フリージアのが壊れちゃったよおおお～～！」

一個小隊を瞬く間に血の海に沈めたブレードが叩き折られ、持ち主は鎖を振り回して悔しがっている。

「来なさい、フリージア！」

「う、うん……」

お気に入りのオモチャを無くした子供みたいな表情で、アンスリューム女史のもとに駆け寄る。

シャツ

隔壁がまたもや間を隔てた。

「ありやま……どうするよ、ライオン君？」

パンツ！

ライオンが自動拳銃オートマチックですかさず攻撃。しかし、弾は軽くはじかれた。

「9パラが一蹴されちゃいました。ダメだこりゃあ
ライオン君がガツクリだ。

(……よし)

とりあえず難は回避した。ブレードの耐久性能から考えて、対物ライフルの弾は炸薬式ではなく徹甲弾だろ？となれば、人間一人が通れるだけの穴を開けるには、多少の時間がかかるハズ……が、防衛本能がけたたましくアラームを鳴らす。アンスリューム博士はフリー・ジアの手を取つて、早足でその場から歩き出した。直後……

「ゴンッ……

音がした。銃弾が当たる音ではない。反射的に一瞬足を止めたが、振り向かずにつぐ歩き出す。

「ゴンッ！」

まだ……隔壁に向かつて何かしている。だが、心配することはない。まあ速く、まあ速く。

「ゴガアアアアアアアア

ン――

「…………ツ！？」

音が大きくなつた。何のつもりだ、無駄な足掻きだ、後ろを見る必要はない。早急に中継地點のへりに乗れば……

「ガアン―― ガアン―― ガアアアアアアアア

ツツン――

「ひツ……！」

音は止まらない。激しさは増す一方だ。それに比例するようにして、アンスリューム博士の歩くスピードも増す。そして……

「…………キイイイイイ……」

脅威に対する好奇心が、恐怖と不安をわずかに凌駕した時、歩く足がピタリと止まって自分の背後を振り返る。そこで見えたのは、肘について寝そべるライオンと、ケツをかきながらウロウロするパ

ンダ。そして、隔壁には “ ヒビ ” 。

「あ……つう…………ー？」

ヤバイ。何かよく分からぬが、ヤバイ。発砲音は聞こえなかつた。その事実が余計な想像力をかきたてる。

「フリー・ジア、連中を見てなさい」

「うん、いーよ」

フリー・ジアはアンスリューム博士の背を守るよつとして、後ろ向

きに歩き出す。生きた盾が監視してくれる。

「…………あ、パンダさんが壁に近づいてきたよ」

「…………」

早速の報告。が、土木用大型トラックの直撃にも耐える防壁を前にして、あんなバカバカしい連中に何ができる？

「あ、脚を大きく開いて右腕を振りかぶったよ」

「…………ッ」

「あ、パンチだ」

「…………」

ボオゴオオオオオオオオオオオオオオオオ

ツツツン！！

「ああああああああああああああツツツ！」

アンスリューム
女史の悲鳴がトンネル内の空氣をひどく震わせた。明らかに何か

が破壊された音がして、彼女の足が歩行から走行に変わる。

「博士え、壁に大きな穴が開いちやつたのだあ」

「何故よツ！？　どうしてよツ！？」

恐ろし過ぎて自分の目では確かめられない。でも、でも、科学者としての好奇心が。

チラツ
……

見た。

「待てやアリ山。ツツツー。」

隔壁をブチ抜いて突破したパンダが、怒号をあげて追いかけてき

やがる。

「ぬ、抜けない……（汗）」

脱出口で腹部をつかえているライオンもいます。

「フリー ジア！ 早く “アレ” をなんとかなさいッ！-！」

「いいの？ 動かなくするの？」

「ええ、セリナシ！ おぬのシ！

「うん、分かつたのだあ～」

タンツ

フリー・ジアは地面を勢い良く蹴つて、追つ手めがけて跳躍する。

「ほ、ヤルつての？ 変態みたいな格好しやがつて！」

「そーだそーだ！エロけりやいいつてもんじゃないぞ！」

パンダとライオンが野次をとばすが、他人様の事をとやかく言え

る連中ではないし、H口の要素はどうでもいいし。

「いつでもお仕事ねえよ」と一矢

フリージアは一瞬で間合いをつめると、超至近距離で回し蹴りを

放つ

「はツはあーツツツ！」

パンダは前に体を折つ

るみの頭部はデカ過ぎるため、ヒット。

ג' טבת

パンダの頭部がフツ飛び、中から咲の本体登場。

「マズイよ、ライオン君！ 予想以上に動きづらい！」

今更自分の悪フザケを後悔しているようだが、相方の

ツの辺りがきつくてジタバタしている。

「二十九」

相方が役に立たないと判断したパンダは、応酬とばかりに振り向きざまに回し蹴りを放つが、フリー・ジアはこれを難無くかわし、相

手の胸ぐらをガツチリつかんで力任せに

ブンツ ! !

「ぬおッ！？」

パンダは女性の目から見ても小柄だが、とても女の筋力とは思えない勢いで吹き飛ばされ、トンネルのコンクリート壁に叩きつけられる。更に追い打ちをかけるべく、姿勢を低くしたフリージアが跳びかかる。

「あひやッ！」

あまりに矢継ぎ早なセカンドアタックに、慌てて垂直に掌底を突き出した。が、ネコ科動物のように体を捻り、これを回避。そして、片手にはまだ折られていない方のブレードが握られ

デンシデンシ
！！

不意の銃撃。フレードを握るフリージアの手の甲を、9ミリ弾が砕く。

ししし「たあ、
ししし」

少女のあいな声をあげて「リリシアの体勢が崩れる

卷之三

肉体的理由から脱出を諦めたライオンが、
オートマチック自動拳銃で援護にまわ
つた。

三
た

「……………な、何だ？」「……………」

すっかり外野に追いやられていた杜若室長に向かつて、パンダが指差した。

「『強化人間』って何?」
ブースト・ヒューマン

マイペースにも程がある

マイペースにも程がある。しかも、同じ質問これで二度目。「違法な投薬や人体改造で、生体機能を特化させた連中だ。言うな

れば……超人だ”

超人！？ つまり、空を飛べたりするワケ！？

飛ばん

「つまり、田からエーハウスが出たりするワケ!?」

出 h

おのれ外道、！」

ノルマ

「日が生たああ～～」
「つぱー生たああ～～」

戦闘能力はともかく、どうやら精神年齢は力ナリ低めのようだ、

室長は自分の部下が全滅した事も忘れ、目の前の展開に呆然としている。

も、うでこな？

「…………うう、治る…………」

「早く帰つて『パパ』とお昼ごはん食べなきや…… そうでしょ？」

子供をあやす母と貞徳する娘……そんな光景にも見える。

ジャラツ

乾いた鎖の音。刹那を描いて襲いかかつた。

「ちツ」

とても人間の反射神経で回避できるスピードではない。咲は着ぐるみの胴体部分に首を引っ込めて直撃を避けるが、鎖は鞭のように器用にうねつて着ぐるみに絡みつき、パンダを拘束した。

「アーヴィング君がアーヴィング君だよ。アーヴィング君。」

氣合一発。フリージアの両腕の筋肉が隆起し、絡め取られたパンダが宙に浮き上がりてブン回される。人間砲丸投げ・第2号だ。

(PFRSめっ、一体、何を造ったんだ！？)

室長が青ざめる。人間の腕力で可能な領域を明らかに超えた、あまりにバカバカしい現実だ。

「咲ちゃん、どう？ 楽しい？」

相方はシマウマのヌイグルミかじつて遊んでるし。
「ヤツちやうからねえええええ！」

十分過ぎる遠心力を加え、フリージアは絡め取ったパンダをコンクリ壁めがけて

「あつそくれつ！」

咲が飛び出した。コンクリと抱き合つ直前に、スボーンっと着ぐるみから緊急脱出。見ためには何やら危機一髪だ。しかも、遠心力を利用して壁を蹴り、猿みたいに跳躍してアンスリューム博士の背後にストン。

「どくよ？」

「うッ……！」

彼女の喉元に押しあてられる咲の剣呑な指。

「あ、アンスリューム博士。すぐ助けてあげるのだ！」

「ダメよッ！」

「えつ？ どうして？」

フリージアの単純な思考パターンが戸惑う。

「メンドーは片付いた。行こうかね、ライオン君」

「うーーん……うーーん（汗）」

またもや脱出口に腹部がつっかえて、ジタバタしている。

「どういうつもりよ……PFRSに何の用があるワケ！？」

立場が逆転して顔色の悪くなつたアンスリュームが、激昂して喰ちちらす。

「用？ PFRSとかいう如何わしい集団なんぞに用は無い

「うんしょ、うんしょ、オナカと背中が……くつつかない」

アンスリューム博士がキヨトンとしている。

「何よそれ……特に理由も無く、ただ成り行きで蒼神博士にくつづ

クライアント

いてたというの？」

「無礼な！ 労働して生活費を稼ぐという、合法的な理由があるー。」

「ガンバレ！ ガンバレ！ 皮下脂肪！」

「……結局は金か」

彼女は両手を頭の後ろに回し、両脚を大きく開く。

「フリー・ジア、先に行きなさい」

「ええ～～、どうして？」

「いいから！」

「…………は～～い」

叱られた幼女みたいにトボトボと中継地点へ向う。

（冗談じゃないわ…… どういう肉体構造しているのよー！？）

彼女は碎かれた隔壁を再度確認して息を呑んだ。

（素手で破壊した？ 人間が？ ありえない…… 神の設計図のタン

パク質と高い適合率を実現させたフリー・ジアが苦戦した…… このガ

キも強化人間？ 敵性国家の？ いや、企業かもしれない）

なんとしてもこの場から逃げ切らなければ、彼女は科学者としての洞察力をフル回転させる。

ダツ ！

逃げた。特に対抗策は無い。ただ単純に逃走するしかなかつた。

「ヘイ！ ライオン君！」

「いいとも、パンダ君！」

パンツ ！

「あうッ ……！」

一発の銃声。アンスリュームの履いていたパンプスの踵が砕け、小さな悲鳴を発して前のめりに倒れた。

「はいはいはいはい、ジータバータするなよーッ 更年期がくるぜえ～～」

不吉な笑顔でパンダが接近してくる。

「で、だ……」

彼女の側にしゃがみこみ、小さな手で頭頂部をガツチリとつかんだ。

「一度しか言わん。よくよく聞きたまえ」
咲の口元がいびつに歪んで、博士の耳元でボソリと囁きだす。

10分後

「いやあ～～まいったね、ライオン君」

「大人は怖いね、パンダ君」

中継地点のヘリポートにやつてきたのは、不自然な一団。手錠をかけられたパンダとライオン。そして、国家調査室長。その前を行くのは、片方だけ裸足になつた顔色の悪いアンスリューム博士。プラス、しょぼくれたフリージア。

「…………？」

へりで待機していた蒼神博士達が、その様子を怪訝とした顔で見ている。

「いやはや御待たせ！」

「さあ参りましょ！」

咲と茜は元気に搭乗。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

いまいち状況が分からぬ蒼神博士が呼びかけた。

「全くもってダイジョーブじゃない！　こっちはもうボコボコにされちゃつて！」

「わたし達の見事な土下座でなんとか凌いだけどね」

証言内容と彼女等の状態がかみ合っていない。

「蒼神博士……部隊は全滅しました」

「そ、そんな……！」

室長の悲痛な咳きに、彼は落胆の色が隠せなかつた。

「外部に救助は頼めないんですか？」

「秘密工作のため、当局との関与について疑いを持たれないよう、一切の定期連絡を絶っています……」

折角出会えた希望が早くも潰えた。

(…………う)

ただならぬ罪悪感が彼の背筋を這い上がってくる。また沢山の人間が死んだのだ。

ヒュンヒュンヒュン

輸送ヘリが上昇しはじめる。コックピットに座るエンプレスが、後ろのアンスリューム博士に一警をくれる。

「あの……何があつたんですか？」

「……何もないわ。ええ、何も」

「そ、そうですか……」

ヘタに追求すれば、余計な火の粉が降つてきそうな……そんな雰囲気のため口を噤んだ。ただ一つハツキリしていることは、一番隅に腰かける不審者二名が、何かやらかした……という事。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2973z/>

考え方よ。

2012年1月1日21時46分発行